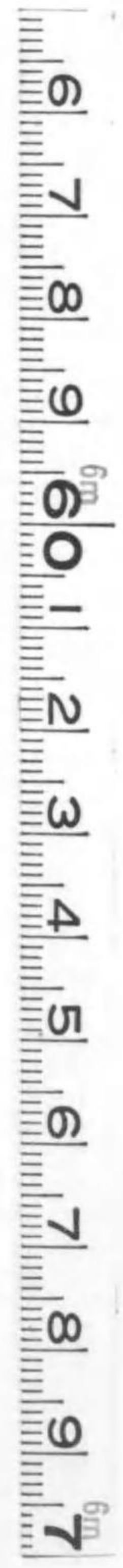




349
191



始



2.5.24

349-191

高橋卯三郎著

精神治療法

附信仰問題と潜在意識

東京 靈潮社發行

六五
2. 12. 19
内交

自序

十七八世紀以來十九世紀の前半に至る頃までは、萬事、唯物主義を根據として解釋せんとしたり、これ其以前の時代が餘りに形式と空想に流れたる反動として、凡のものの實驗せらるゝにあらざれば信する能はずとするに至りたる也。予輩は之も世運進歩の一現象として認むるに吝ならず、然るに其と共に謬想を惹起せるは、凡そ實驗せらるゝものは物質に限る、故に物質にあらざる精神の如きは實在にあらずと獨斷するに至れること也。其結果、精神的現象に對しては成べく物質的に解釋せんとし、もし解釋し能はざるものあれば、これたゞ迷妄なりとして、排斥するに至れり。

唯物主義の旺盛なる頃、尤も著しき發達を示したるものは醫學なり、人身に關する科學的研究は實に微細なる點にまでも及びて殆ど遺憾なきに至れり、斯くて疾病の如きは、藥物をもて補充するの他、途なしと見たれば、其材料につきても愈精練せらるゝに至るは實に賀すべきこと也。然るにこゝにも又一つの

謬想起りて、藥物以外、疾病治療の途は全くあることなしと獨斷するに至れり、勿論、醫學上にも、多少精神の感應影響等を認めざるにあらずと雖も、既に精神其ものを以て虚妄と見做す以上は、其影響が實際如何程迄に達するやを實驗する能はずとして、之を度外視するは、亦止むを得ざることと謂ふべし。

現今の醫學は人身の解剖分析よりする説明につきては、殆ど遺憾なきに至れり、然るに其割合治療に對する方法の進み居らざるは何人も遺憾とする所なり、其の疾病に對し、某の藥物を應用して功驗なき時は、もはや如何ともする能はざるが如し、ことに、精神と密接の關係ある神経系統の疾病に至つては一層然るが如し、然もこれ單に唯物主義を根據とする者の當然、突當らざるべからざる困難と謂ふべし。

然るに往古より精神作用の人身に及ぼす影響につきて、經驗上、其顯著なるを認めて、之を應用せる者少からず、或時は之を宗教中に包容する場合あり、又或時は哲學と伴隨せしめて種々なる形狀を帶はしむることあり、所謂信仰治療と稱するもの、又一種悟道に入れるもの、中に、著しき療癒者を起し、無病健全者

を出だす例も少からず、然り、これが今日に至るまで、唯物主義に對抗して衰滅せざるも亦理由なきにあらざる也。

十九世紀の後半より今世紀に入るに及び、唯物主義の勢力は大に減退し來ると共に、精神其もの、實在たるのみならず、其動作の跡を實驗せらるゝに至れり、而して精神力には物質の企及し能はざる程偉大なるものあるをも知らるゝに至れり、さればにや近時の哲學傾向は、物質の本質をも精神化せんとする程となれり、そは兎も角、精神は物質の幻影にはあらずして一個の實在なることは殆ど疑ふべからざるに至りぬ、其結果、疾病の如きも、たゞ物質の補助のみならず、精神力に待つこと大なるものあるをも認めらるゝに至れり。

本書著述の目的も斯點に重を措ける也、精神治療法の原理は、たゞ人體療治のみに止まるにあらず、精神の實在と其能力を認めて、物質と相並びて兩々相働くべきものなることを闡明せんとするにあり、此意味に於て本書の著述は、今日に遺れる唯物主義の謬妄を警醒せんとにある也、但し精神力の作用如何につきては尙不明の點甚だ多かり、其活動法則の如きも殆ど明かならず、此等は

今後の實驗と考究を待つて、大成を將來に期すべきものたるを告白せずんば
 あらず、されば本書の所論の如きも、甚だ幼稚不完にして、其實験方法の如きも
 未だ至れるものにあらず、然し目下の處、これ以上に進むことは蓋し困難なら
 ん、もしも此方面に於ける研究、愈進むあらば、將來精神治療法が、今日の醫術
 と相待つて、世の疾病者の爲に、多大の貢獻をなさんことは、予の信じて疑はざ
 る所なる也。

本書下篇には、予が基督教者の立場よりして、信仰問題に稍新しき解釋を下し
 たり、蓋前篇の所論と相通するの點あり、以て精神治療が信仰治療の名の下に
 古代より宗教と相結べる理由を判するの參考に供したる也、在來の宗教は一
 方餘りに形式に泥むと共に、他方には餘りに理窟に流れたり、爲に何れも宗教
 の眞髓を捉へんとして捉ふ能はず、何となく物足らぬ心地したるが多し、假令
 は神其ものにつきても、信仰其ものに對しても、形式と理窟の外に超越して確
 認するもの殆ど稀なり、こは餘りに現在意識に執着して、潜在意識の靈力に觸
 れざるの致す處なりとす、況んや神人合一などいふ實驗を解せんとするに於

てをや、要するに、人身に及ぼす不思議なる作用も、心靈に臨む奇異なる現象も、
 其根底には同一靈力ありて、然らしむるものなるを思へば、宇宙の大靈に對し
 て一層切實に崇敬を拂ふに至るなるべし、予は思ふ將來の宗教的信仰は、此邊
 を了解して、初めて、其面目を新にするに至るべきかと、
 敢て一言を述べて序文に代ふ。

大正二年十一月

著 者 識

目次

第一章 予が精神治療を修むるに至り

たる由來

(二頁—二五)

予が精神治療に興味を有しし事——從來予が病氣に對する考——兼てよりの一疑問——基督教と疾病治療——クリスチャンサイエンス、シオン協會及び神癒派——催眠治療法——藤田式岡田式の呼吸法——濱口熊嶽等の治療法——唯物主義と迷信家の間に立ちて正當なる解釋を與ふべき義務——宗教家が病人に對する時の無能——新方法的發見と人心の歸向——宗教家として冷視すべからざる問題——イムマヌエル協會の主唱——予の決心と自修

第二章 肉體と精神

(二二頁—二四頁)

肉體と精神の關係——此關係につきての諸説——予の考説——疾病には肉體から來るものと精神から來るものとあり——精神が病氣に及ぼす例——氣分と病氣——氣力と疾病との關係——如何なる精神が肉體に其結果を及ぼし、又惡結果を來たすか——病氣と不識の状態——病氣と意志の力——病氣と精神集注——病氣と靜坐法——何故に無念無想が疾病に其結果を與ふや

第三章 潜在意識

(二五頁—七〇頁)

潜在意識の實在——潜在意識の心理學上の地位——下等動物と潜在意識——人間の機能と潜在意識——人間運動作用の秘力——身體の組織と潜在意識——自然的治療——疾病を防ぐ秘力——無意識的治療——一婦人の潜在意識的疾物の例——心意と潜在意識——意識の狭範圍——潜在意識發出の例——夜間無意識に文章を草せし例——亞米利加土人の例——一青年の例——人名物名の遺忘と喚起——一醫師の實驗——潜在意識の記憶力實驗——精神の分離状態——天才と潜在意識——感興なき著作及び説教——一牧師の實驗——一學者の實驗——インスピレーション——現潜兩意識協力の作——氷山の譬喩——潜在意識のみの無効——天才と天才ならぬ者との區別——無意識作用——催眠者の時間的記憶——無意識作用の例——實際生活と潜在意識——婦人の勇氣——狩獵者の例——愛兒を助けんとせし母の勇氣——大手術を忍耐せし少女の例——愛と潜在意識——シヨウメンハウエルの戀愛論——愛の本質——宗教と潜在意識——科學哲學者が宗教に對する誤見——宗教の本領——科學と宗教の調和——精神治療に於ける潜在意識的作用——精神治療にて癒ゆべき疾患——潜在意識は病的心狀にはあらず——潜在意識の本質は如何——サンター博士の所説——神と潜在意識——神は直覺せられざるべからざる理由

第四章 催眠術と其價值

(七一頁—八五頁)

潜在意識と催眠状態——催眠術の濫用——潜在意識を起すに必要な一條件——催眠状態の意識は現在意識とは全く別様なり——催眠中の精神活動は著しく身體に影響す——催眠中の精神活動が力量及び性格に影響を及ぼすこと——催眠状態中には遠距離の事物を直覺す——催眠状態の潜在意識研究に二個の困難點あり——潜在意識活動が現在意識に反應する場合——催眠中の潜在意識活動は受動的なり——催眠治療法の缺點——潜在意識活動の積極的方面——催眠と精神集注との差異——自信力と其感應——催眠治療法と精神治療法との差異

第五章 暗示

(八六頁—一〇一頁)

暗示とは何ぞや——現在意識に於ける暗示——子が病中の實驗——種々なる精神状態と暗示——強迫觀念——強迫觀念と潜在意識——暗示と疾病——病的潜在意識と健全なる潜在意識——健全なる暗示を與ふる效用——自己暗示——惡き自己暗示の例——同例二——善良なる自己暗示

第六章 精神の感應

(一〇二頁—一二三頁)

精神と感應——精神力が物質力に打勝つことは永く世に認められず——自己の精神力が他人の

身體に影響することを認めざる人あり——精神が他人に感應する例證——化せらるゝとの義——
—感化の二例——催眠状態中の感應力——他人の身體に針を刺す人の例——予が精神治療法は
此感應の理を應用す——新約聖書中に見えたる二種の信仰療法——精神治療法と催眠治療法と
の差

第七章 精神治療の方式

(一三頁—二九頁)

予が精神治療の方式——自修方式其一、深呼吸——頭寒足熱——深呼吸の仕方につきて——其
二、一向專念になること——岡田式靜坐中に四肢五體が動き出す理由——潜在意識活用の徒費
——其三、氣合と摩擦——元氣と體力——摩擦の効能——自修法には忍耐と努力を要す——他人
に施術する時の方法——目と目を見合すこと——精神治療の回数

第八章 精神治療の範圍と實驗

(一三〇頁—一四八頁)

精神治療の効力の範圍——神経系統に屬する疾病と精神治療——醫藥と精神治療の間には特長
の差あり——肺結核患者の高熱を下降せしめし例——腹痛者に施せし例——神経系統に屬する
疾病——喘息、リウマチス、神経痛——ヒステリー患者を治療せし例——胃病患者に施せし例
——病名不詳の患者に施せし例——種々なる實驗、顔面神経痛——胸部神経痛——リウマチス、

角田氏の實驗譚——指の疾患——汽車電車に酔ふ人——夜分に手足の痛む患者——患者の例
——奉天にての實驗——肩凝、頭痛、齒痛等——宗教家としての精神治療——肺患者と精神治
療

第九章 精神治療と宗教道德問題

(一四九頁—一六七頁)

精神治療に對する二謬見——神に對する二謬見——基督教家は精神治療を闡明する義務あり——
—宇宙の全能力と其發現——宇宙の靈力の感應は我等の準備に存す——神靈信者との對話——
燒點と感應——藥物配劑と燒點——我子の病氣に一生懸命になる親心——基督信者が病氣平癒
に對する誤見——迷信の眞義——信仰の眞意義——精神的燒點と道德——一友人の修養談——
教育と精神的燒點——演說說教家の精神的燒點——凡の感應の根原は一なり

第十章 病苦解脱法

(一六八頁—一七九頁)

病人に有害なるは恐怖の念なり——二種の恐怖心、其一、死の恐怖——死の恐怖の除去と宗教
的信念——信念によりて生命を延べたる實例——其二、病氣の恐怖——未聞人が病氣に對する
恐怖——文明人が病氣に對する恐怖——病氣を恐るゝ實例——自分で病氣にして仕舞ふ人——
白隠禪師と原坦山——疾病の三原因と三治療法——本書を公にしたる目的

精神治療法

高橋卯三郎著

第一章 予が精神治療を修むるに至りたる由來

私がこれから講述せんとする精神治療法は、此數年來、聊か攻究もし、自修もし、且數多の男女患者に實驗したる事實を、成べく心理的に又宗教的に解釋を試みんとするのであります。が、これを説き始めるに當り、私が何故に斯いふ事に興味を持ち、且修得するに至つたかといふ一通りの筋途を、少しくお話致しておく必要があると思ひます。

元來私は信仰治療とか、精神治療とかいふ事は、甚だ好まない質でありました。私の考では、もし我々が病氣にかゝれば、醫者の指導の下に、適當なる

予が精神治療法に興味を有しこと

從來予が病氣に對する考

服薬をなし、養生をして居れば、それで十分である。何も其上思ひ煩うに及ばない。其病氣が三日で療るものならば三日、一週間でよくなるものならば一週間、何等の不平もなく、泰然と辛抱して居るが當然である。若し不幸にして不治の病氣に罹つたとすれば、これも何等かの天命とあきらめてジツと忍んで居れば宜しいので、普通の服薬養生をして居る以上、彼此、特別に神佛などへ祈願を籠めるなどいふことは、所謂迷信であつて、知識ある人間としては、斯る愚なるまねをなすべきではないといふ立場に、久しく居た者であります。

併し其中にも、兼て自分に一個の問題となつて居て、ハツキリ解釋のつかなかつた一事は、古今何れの宗教に於ても、必ず病氣平癒に關係する事柄があり、又其に對する方法のある事であり、成程昔時に較べて見ると今日の醫學は、非常なる進歩をして居るに相違ありませんが、さりとて又其時代々々には、必ずそれ相應の醫術の行はれて居つたに相違ありません。古代に遡つて見ても、耆婆扇鵠などいふ名醫大家も存在して居たので

ありますが、それに關らず當時の人々が、たゞ醫師や服薬だけによらず、一種の信仰によつて、病氣を醫されたしと願ひ、又癒されたりと信するものが多くあつて、醫薬とは、全く別途の方面に歸依するものが少くなかつたそれを一言に、迷信といひ切つて仕舞へばそれまでの事であり、私はどうもさう無造作に看過せられない事實と見たのであります。又今日の如く醫學の進歩した時代に於ても、はや左様なる信仰的治療法は、要せなかつたといふに、實は左様でなくして、矢張り一方に依然として存在して居ります。所謂加持祈禱や「おまじない」の如き舊式のもの、は次第に消滅して参りますが、それに代つた一種の信仰治療法が興起して参ります。而してそれも全然効能がないものならば、誰も見すてゝ願はずまいが、中には随分名醫にかゝつて、はかばかしく往かなかつた病氣が、一種の祈禱の結果、奇妙にも癒されたといふ事實も、現れぬではありません。

私等の信仰して居る基督教に於ても、古來から病氣治療に關する記事や方法が、何時もつきまとふて居ます。御承知の如く聖書には、キリストを始

クリスチャン
サイエンス、
シオン協會、
及び、神靈

催眠治療法

四
め弟子等が病氣を癒やした記事が、いくらかも載せてあるのみならず、當時普通の信者中にも、疾病を治する力を賜はつて居たものがあつたとまで明記してあります。又義人の熱き祈禱は、病を治するに力ありといふやうな文句もあります。熟ら考へて見ると、何故斯る記事が、聖書を始め、千九百年以來の基督教に、何時も附隨して滅せないのであるか、此事に對しては、どうも輕々に冷淡に笑視し去るべきものではないとまで考へ及びました。

米國に於てはクリスチャンサイエンスの名の下に、一種の信仰治療をなす教派あり、亦一時名高かりしダウエー氏がシオン協會の如きも、なかなかに勢力を振つて居りました。我國に於ても一派の基督信者中、所謂神癒なるものを信じて、頻に之を主張して居る者もあります。此等を思ひ合せて見ると、たゞ一概に其等を迷信だ一笑に附し去るは間違つて居ないかと氣附いて參りました。

然るに數年以來、我國にも宗教家ならぬ人々の中にも、精神治療の名の下

藤田式岡田式
の呼吸法

五
に、一種の信仰治療をなす者が現はれて來ました。彼等の多くは、催眠術を應用して、患者を治療するのでありますが、此催眠術なるものが、今迄興業師や、大道野師の如きものに亂用されて、一種の見世物になつて仕舞ひ、或は未熟な輩が注意して暗示を下さない爲に、甚だ良からぬ弊害を醸すに至つたので、催眠術といへば山師的行動のやうに、惡感情を世に與ふるに至りました。然しかの桑原俊郎といふ人の催眠治療法や、其後に現はれた藤田靈齋といふ人の息心調和法の如きは、一種の深呼吸と觀念統一の修養によつて難病を治し得ることを意唱して大に一般の注意を惹起すやうになりました。其の後岡田寅治郎氏が米國から歸つて、靜坐法といふ名の下に、これも一種の呼吸と冥想によつて、心身を健全にすることを主張するに至つて天下の人心は大に此方面に傾くやうに至つたのであります。私の見る處によれば、藤田氏も岡田氏も、其形式には多少異なる點はありますが、けれども、何れも同一根底を有する精神作用の結果であることを認めました。然し此兩氏の方式は直接宗教には關係なく、岡田氏は殆ど生

理的のみであり、藤田氏のは、生理兼心理的でありますが、然し何れも宗教といふ點には餘程縁遠いものとなつて居ります。然るに他方には、從來より全然宗教的態度より、此精神治療をやつて居るものが少くありません、たとへばかの濱口熊嶽といふ僧侶がこれをやつて居りますが、彼は精神治療の如何なるものたる事を學術的に解説しませんが、只神佛の御利益で療るやうな事を言つて治療を致して居ります、其他神官僧侶の中には加持祈禱の名目の下に同じ精神治療をやつて居る者も少くない様であります、基督教中にも、かの神癒派の人々は、單に祈禱として諸病を療し得ると信するのみならず、醫藥を却つて罪惡のやうに唱ふるものさへありますが、これも精神療法は何者たるを知らず、禱つて居れば、神様が直接手を下して癒して下さるものゝ様に、至極單純な考に基づいて居るものであります、私は此等の状態を比較参考して、心密に期する處がありました、精神治療といへば、一方には催眠術家が呼吸式家の如き宗教家ならぬ人々の手で行はれて、宗教上に何等の關係が附いて居

りません、之と同時に、他方に於ては、一向精神研究もせないで、たゞ神佛の御冥助御加護といふが如き、殆ど迷信に近い態度の下に、同じく此事が行はれて居ります、これ等は何れも正鵠を失したものであつて、精神治療の根底には、是非信仰的解釋が必要であると共に、他方には心理的研究の下に立たねばならず、而して此治療法が事實上著々効果を奏して往くのであります、此事は結局眞面目な宗教家の親切叮嚀に考究すべき問題であることを深く感ずるに至りました、何となれば、實際世には、病人が多いのみならず、之が爲になやみつゝあるものが非常に夥しいのでありますから、我々宗教家が、たゞ單に慰藉的の言計りで、彼れ等を緩和しようとしても、到底其効果は奏し得られません、病人に對して、あなたは醫者と薬とによつて、十分に養生をなさいませ、それで治らねば、神の御意とおあきらめなさいませといふ丈では、實際慰藉の効力の少ない事は明白であります、又普通の牧師傳道師等が、病人のために祈禱を依頼せらるゝ時、彼等の中には、祈つて見ても、治る時には治り、治らぬ時には治らぬのであるか

六
ら、ツマリは一向當にはならぬが、然し病人の氣やすめのために祈つてやれといふ位の心持で祈る場合も少くありません、祈る者の心には、何等の自信も確信もないので、たゞ一時病人の氣休めのために、神の名を濫用するやうなことも往々あるのであります、成程醫師と藥の他には、頼となるべきものはないといふ考の行はるゝ處には、仕方なしに、醫藥に依頼して居りますものゝ、近頃の如く、藤田式とか、岡田式とかいふ別に精神治療法が、新に起つて来る日には、數多の人々は、靡然としてそれに歸依して參るのであります、其中には學者博士と言はれる人々もやつて来るのであります、斯いふ時には、一方の極端から他方の極端へ走り易いものでも、う藥は入らない、醫者も入らない、たゞ精神さへあれば病は癒ゆるものだといふやうな、非常識家も出來て參りますが、それは兎も角、斯く迄人々が、身體の健康の恢復に熱中する事實は、我々宗教家の大に注意すべき點であらうと思ひます、岡田式の靜坐法には、随分有名なる紳士博士連も加入して、頻にやつて居られます、さういふ人々も、矢張り普通の醫術や養生法だけで

は満足が出來ず、新方法が現れ來ると、矢張りそれをやつて見たくなる、こゝに人情の眞實が現れて居ると思ひます、そこで私は考へました、身體の健全法や又は病氣の治療法が、醫藥の外に何の道もないものとするれば仕方ありませんが、醫藥以外に、尙其途ありとし、而して、それが、物質的の方面でなく、精神に關係あるものとすれば、平素、精神問題については専ら力を入れて居る宗教家等が、決して輕々に冷視し、又打棄ておくべき事柄ではないと思ひました、ことに我々基督教家の立場からいつても、一方には病氣をたゞ醫藥のみに依頼すべしといふ唯物主義あり、他方には、たゞ加治祈禱さへすれば治るものだといふが如き幼稚な信仰のある、其間に立つて、正確なる解釋を與ふるのみならず、實際、世の幾萬の不幸者が、渴仰希望する處に、多少にても満足を與へ得らるゝならば、これ丈けでも大に有益なる働であると思ふたのであります。

近頃米國に於て、イムマヌエル協會といふ一團體が起りました、此團體の主張は、病苦を除去するは、人間慰安中の最も大切なる一部分である、然る

にこれ迄病氣の一事は、單に醫者に委せ切りにしてあつたが、これは大なる間違である、病氣の中、特に神經系統に關するものは、醫師の手でも如何ともすべからざるものが多い、服藥や外科術の到底及ばないものがある、此等に對しては、精神治療を施さねば恢復の見込のないものがいくらもある、そこで將來の治療法はたゞ醫藥のみにては十分の効果を奏し得ないと宣言し、此立場から精神治療を鼓吹すると共に、結局基督教的信仰に歸着すべきことにまで説き進めて居ります、兎に角此團體は往時のクリスチャンサイエンスやシオン派の如き、純粹な信仰一逼の主張ではなく、大に近世の心理學を應用して、新主張を示しつゝあるのであります、前申すやうな處から、私も一つ奮發して、自ら此衝に當つて見たいといふ覺悟が起りました、勿論これには餘程注意せないと、一方からは迷心家のやうに見誤らるゝ處もあり、又他方からは山師の業のやうに冷評せらるゝ處もありました、然し先年來、考察と自修の結果、出来るだけ心理的にも解説し得られ、又基督教信仰に基く見解をも與へらるゝことを、略自信

子の決心と自修

するやうになりました、且全國を巡遊中、彼處此處に於て殆ど三千人に近い男女に試みました處が、思つたよりは好結果を奏しましたので、愈々今後にも力を盡したいと思つて居ります、勿論、自分にも未だ了解の出來ない、又修養の足らない處から、十分に行届かない點もありますが、兎に角精神治療なるものが、決して迷信でもなければ、又醫藥を排斥する理由もなく、兩々相待つて、一段の効果を奏すべきものである事を認めましたから、これより私の研究の所見を披露して、同好の士、ことに病中にある人々の慰安に供したいと感じ、こゝに本書を書きつゝた次第であります、

第二章 肉體と精神

精神治療法の事柄を御話するには、初に身體と精神の關係を説く必要があり、ありますから、こゝに少しく陳述致します。物質の内で、一番精神と近い關係を持つて居るものは身體であります。我々の精神は、肉體以外の物質にも影響する所ありますが、然し精神が直接の感應を與ふるものは肉體であります。何故なれば、肉體と精神とは、常住不斷離るべからざる連結を以つて働いて居るからであります。さて此精神と肉體の關係如何といふ問題は、古來より種々と研究せられて居りますが、今に其真相は判然致しません。極めて幼稚なる時代には、肉體は肉體、精神は精神と、別々のものが相寄つて、人間又は動物を造つて居ると考へたのであります。其頃には精神も矢張一種の形體を持つたもので、何かフワ／＼して宇宙間に飛廻つて居るものゝ様に考へました。人間が生きて居る間は、靈魂は其人の胸のあたり止るとか、或は腹にあるとか、心臟に宿つて居るとか、種々なる臆説

を立てたものであります。が、學問が次第に進んで來るに従ひ、精神機關は、腦髓に存することを確むるに至りました。處が又其考が極端になつて、腦髓即ち精神であると主張するものも起るに至りました。其等の人々の考では、もし人間の腦髓が破壊さるゝならば、精神心霊などいふものは同時に消滅して仕舞ふ。ツマリ、精神は物質組織(腦髓)の影のやうなもので、其組織が破壊すれば、精神は亡滅するに他ならぬと説きます。今日に於ても、醫者や科學者の中には、尙此説を主張して居るものも少くありません。處が之と反對で、精神が物質に感應し又支配するといふ經驗を有つて居る人々は、他の極端に走つて、物質が却つて影であり、精神が本體である。此世に物質と見えて居るものも、ツマリは精神が生み出したる一種の幻影に過ぎない。故に物質は時々刻々變化すれども、精神は一定不變であると主張します。禪宗の僧侶、一派の哲學者の中には、往々此説を主張して居る者があります。然し近頃の學者等は、此兩極端を調和せんとして、物質も精神も同一根元から出て居るものであるが、其根元は如何なるものか解らない、

疾病には肉體
から來るもの
と精神から來
るものとあり

併し物心兩現象は、ツマリ一根本の兩面の顯象であるとするが、尤も勢力を占めて居る説であります。

私はこゝに物心兩者の根本義を、哲學的に解説しようとするのではありません。然し虚心に考へて見ると、物心兩者の一を、全く夢や幻と見て、たゞ其一方を眞實と見るは、餘りに極端の考だと思ひます。其根本はたとひ如何いふ處から來て居るか知れないにせよ、兎に角物心兩者は、確に實在して居ることは疑ふべからざる事實と思ひます。ことに我々の身心に徴して、最も其證據の著しいものを見るのであります。

例を引いていへば、我々が病氣になるといふは、我々の肉體の或部分に不調和を來たし、順當なる活動を爲し得られない結果であります。然し此不調和の結果たる疾病は、肉體の損傷から來るものもあれば、又精神の損傷から來るものもあります。一見單に肉體から來たと見ゆる病氣も、よく探つて見ると、精神の損傷が伴ふて居らぬものはないのであります。それ故恢復の途も、たゞ肉體の方面許りの治療では足らぬと云ふことは、理の當

精神が病氣に
及ぼす例

然であります。又事實さういふ風になつて居ります。同じ病氣にかゝつて同じ藥を服して居るものも、信用する醫師の藥と、不信用なる醫師の藥と、藥には別に變つた處はなくとも、患者の心持によつて、利目に相違あることは、何人も知る處であります。東京のある有名なる病院へ、田舎から一人の患者が來ました。此人は老婆で、盲腸炎にかゝつて來たのであります。診察して見ると、もう時期が遅れて居る。然し其老婆は、こゝに來て、手術して貰へば必ず治ると信じて來たから、是非治療して下さいといふ。折柄同時に一人の醫師が、同じく盲腸炎にかゝつて入院しました。此人の病狀は、左まで大したことはなく、切開すれば大丈夫治る見込がありました。處が以前の老婆が頻に懇願する處から、ダメだと思ひながらも、次手に手術を施してやりました。手術後老婆は茶漬が食ひ度いといふ。院長は到底助からぬ病人の事だから、老婆の心のまゝに食へさすがよからうとて許しました。さて翌朝になつて見ると、老婆の病氣は案外に経過がよい。そこで醫員等も急に手當をして、養生させた處が、遂に全快して歸りました。之に反し

て醫師の方は、自分が醫師である處から、切開後二十四時間以内に發熱すると、危険の恐れがあるとの事をよく知つて居りますから、心配でたまりません、屢々驗温器を當て、見て「もう熱が出やしまいか」とビクビクして居りました處が、自分の神経から、終に熱を惹起し、それが爲に其人は遂に亡くなりましたといふ事であり、醫術の立場からいへば、老婆の方は、到底望はないもの、後の醫者の方が十分に見込があつたのであり、ますが、其人々の精神状態の相違から、老婆は手術さるれば必ず治するといふ信仰があり、醫師の方は、なまなか醫の道を知つて居る許りに、發熱の疑心は、疑はれて、倒れて仕舞ひました、我々日常の間にも斯ういふことはたび／＼經驗致します、コレラ病が流行すると何となく腹の工合が悪い感が致します、肺病患者の中に居ると、妙に咳嗽が出たくなつて來る、精神が肉體に及ぼす影響は、決して争はれない事實であります、醫學上の一説によると、藥は必ずしも病氣を癒すものではない、病氣の爲めに、愾衝を起したり、發熱するそれを防ぐのが、藥の效能であつて、病氣、其ものは、身體の

内部の力で、自然に癒えて來るのであるとの事であり、私は病理學上の事は解りませんが、一寸考へて見ても、左様だと思はるゝふしがあります、す、例へば手に疵をする、膏藥を貼つておく、然し癒ゆるのは、其人の元氣如何により、ます、もし膏藥のみが疵を癒やすものならば、同一の疵で同一の膏藥をはつておけば、必ず同一の時間に癒えねばならぬ筈であります、が、實際は左様であり、ません、氣の弱い者は、同じ手當が施してあつても、疵の平癒がおそいが、元氣のあるものは、早く治ります、又もし一寸の疵をしたものが、それに應ずる膏藥や手當で治つたからとて、一尺の疵を負ふた時、其十倍の膏藥や手當で治るかといふに、さうは往かない、數學上からいへば、一寸と一尺とは、一と十に當るから、十倍の膏藥をはつておけば、いゝ勘定ですが、一寸の疵をした時と、一尺の疵をした時との元氣が違ふ、一寸の時には、ナニこれ許りの疵がといふ氣力がありますが、一尺の傷を負ふと、其の元氣が衰へる私は、内臓の病氣でも、左様であると思ひます、服藥して居る病人の心持如何によつて、其快癒に遲速があると思ひます。

全體病氣は其人の氣力に伴ふものでありまして、其氣力が疾病に優る間は疾病は癒えますが、其氣力が疾病に劣ると治せないと思ひます。たとへば手首を火傷すれば、身體の元氣は、手首以上でありますから治療は出來易い、然し身體の半分以上を火傷した時は、餘程大なる氣力を養つて居る人でないと治療が難かしい、外部からの手當は十分であつても、元氣がないと癒えません。肺病にかつた人でも、初期の時分に、元氣旺盛ならば、快復の見込は確であります。末期になると、まづ六ヶ敷い、といふ理由は、肺病其ものゝ損傷よりも、其人の元氣が乏しくなる。然し私の友人中に、醫師から最期の宣告をうけたに係らず、堅實なる信仰と、元氣があつたが爲に生き存へて働いて居る者があります。之に反して、病勢は初期であるに係はず、非常に落膽したが爲に、バタリ危篤に陥つて亡くなつた者を知つて居ります。此等は何れも病氣よりも、其人の精神如何に關係して居ることが明白であります。

體と精神が如何いふ關係で存在して居るか、其真相は解らないにしても、肉體以外に精神の實在して居ることは、否定せられません。そこで一步を進めて考ふべきは、然らばどういふ精神が肉體に好影響を及ぼし、如何いふ精神が悪結果を來たすか、われわれは精神の存在を承知して居る。然し一旦病氣にかゝると、其精神が必ずしも肉體の味方をするといふ譯ではない、時には反對になつて、病氣を増長させることもある。此等に對して、精神の持方を如何にすればよいかといふ疑問が起つて參ります。俗諺に「盲者蛇におちす」と申すことがありますが、私等は、何にも知らない時は、平氣でやつて居て一向恐怖も起らないことも、多少の知識が出來て來ると、種々の事柄を想像して心配し出します。ことに病氣の際には、これが一層激しくなるのであります。醫者に見てもらふ迄は、一向に氣づかなかつた病氣が、醫師の注意と共に、俄に心配で堪らなくなり、それが身體に大惡影響を及ぼすが如きことは、いくらもあり、又腹や齒が痛んで堪らぬ胸元がつかえてならぬ、其時傍の人々が「起て居るといけないから暫

く眠りなさい」とすゝめる、そこで暫く眠て見ると、齒も腹もケロリと治つて仕舞ふことが屢々あります、我々が病氣にかゝると、必ず身體を休めねばならぬやうに出来て居る、休んで横臥すると、必ず眠くなるやうに出来て居る、眠ると元氣が恢復し、従つて身體の工合もよくなる、如何なる病人でも眠つて居る時は、病氣を忘れて居ります、病人が眠つて居る中に、病氣の夢を見ることは稀で、大抵は健全に活動して居る夢を見る、起ると自分が病人であるといふことを再び意識して来る、我々が意識して居る時は、眠つて居る時より病氣の爲に却つて面白くない傾向になつて居ることは事實であります。

處が又こゝに斯いふ事實があります、たとへば負傷をして痛むとの意識がありましても、其時自己の意志を強うしてウンと堪へて居ると、其痛さが割合に軽い處が此意志といふものは、意識とは違つて何だか腹の奥底から涌き出るやうであります、兎に角此意志の力は普通の意識を打破つて、大に病氣に打勝つ力を持つて居ります、所謂元氣ある人とは、此意志の

強固なる人をいふので、元氣者には病氣がよりつかない、たゞ氣の弱い者程、疾病に取りつかれ易いので、又病が取りつかれた後も、氣の弱いものは如何してもそれを撃退することは困難であります。

尙又斯いふ事實があります、左程意志の強くない人でも、一心になつてジツと心念を集めると、不思議に苦痛が取去らるゝ、所謂ある一事を専念に考て居ると、其間は少くとも病を忘れるといふ場合が屢々あります、一寸した苦痛に心を亂して頻に煩悶し出すと、其苦痛は益々激くなつて来る、其時我心を静め、氣を落つけて、ジツと亂れた心を一に集めると、其苦痛が案外に治まつて来る、これも我々が日常に經驗する處であります。

尙一の事は、俗にいふ加持祈禱鍼灸などが、屢々病氣に効を奏する事であり、永く醫師の藥を服しても一向治らなかつた病人が、加持祈禱によつて不思議に治つたといふ例はいくらもあります、又醫師の見放した病人が、灸や鍼で回復したといふ例も、少なくはありません、今迄の人々は、此等を以て單に迷信であるとして一笑に附して居りましたが、問題は左様

に簡易な事では解決出来ません、自分等が如何に手を盡しても療えなかつた病人が所謂「迷信」といふものゝ御蔭で治つたとすれば、迷信なるものも必ず悔るべからざる効能があるではありませんか、たゞ之を迷信と一概に排斥し去るは、盗んだ鈴を隠さうとして自己の耳を蔽ふのとツマリ變つた處はないと思ひます、此「迷信」の名の下に排斥せられて居た精神状態中に、普通の意識から見れば、到底解すべからざるものが存するといふことを發見したのが、近頃心理上の一大進歩であります。

目下我國で流行の藤田式や岡田式の靜坐法も、成べく意識の活動を收め、たゞ一點に集注するか、或は殆ど意識状態に居らないやうにすることを奨励するのでありますが、さうすると其處に不思議な力が現れて來るのであります、禪僧などの中には、無念無想の修業をするが爲に、身體が大に強健になり、一服の薬も飲まずして、終生病氣にかゝらず、又罹つても直に退散せしむるといふ實驗を有した人々がいくらもあります、原坦山といふ名僧は、惑病同源説、即ち病は惑である、惑て居るといふことに氣がつけ

ば病は亡くなるといふ説を主張せられました、自分は其通りにして其最後まで少しも病氣に罹らなかつたといふことであります、之は要するに我々の意識が迷亂すると、病氣の基をなし、病氣にかゝつて彼此と掛念心配する程、其はいよゝ不良となつて參りますから、其際は心を取り直して、所謂「心機一轉、新しい心持になる時、始めて病勢を減退せしむることは、疑なき事實となりました、處がそれについて、尙一の問題が起つて來ました、それは我らが此意識を働かして居る間は、甚だ宜しくない、或は安眠するとか、精神を一點に集注するとか、但しは一種の信仰を有するとか、鬼に角現在の意識を、成べく働かせないやうにして所謂「一心になると、不思議に病勢が減退し又快癒するに至る、これには現意識以外に、何か他の精神作用が加はるのであるまいか」といふ疑問が起つて來たのであります、往昔は、病氣は餘り精神を勞し過ぎる結果起るものであるから、其精神を安息さへすれば、身體も次第に休まつて、病氣も少ない、又出來た病氣も癒える道理であるとして居りました、併したゞ此精神を休息させるとい

ふ消極的の作用で、病氣は癒える者であらうか、寧ろ積極的に他の精神活動が加はつて然らしむるものではあるまいかといふ疑問が起つて來ましたが、これは獨り病氣許りでなく、他の種々なる精神現象を調査研究したる結果、我々が有する現在意識の外に、平素一向氣付かないが、然し隠然我々の身體に大影響を及ぼしつゝある一種の精神作用があることを發見するに到りました。此精神作用は潜在せる意識の然らしむるもので、これが精神治療上に多大の關係を有して居るのであります。潜在意識については改めて次に講述することに致します。

第三章 潜在意識

前回に於て、精神と身體の關係を述べ、ことに疾病に對する精神的影響が如何に重大なるかを御話申しましたが、今回は進んで、其精神の如何なる力が、疾病の上に大關係を有するかにつきて御話申上たいと思ひます。既に前にも申上げた通り、これに對しては、勢ひ潜在意識の事を御話申す必要がありますから、私が從來考究したる此意識に關する大要を陳述して見たいと思ひます。

全體信仰治療の問題は、古來から傳へられて居る處であります。近頃これが心理上尤も興味ある問題となり來つたのであります。それは我々の普通意識の外に、他の意識が存在して働くといふ一ことであります。我々が覺醒して居る時には、妙に隱伏して其本質を顯はしません。たゞ漠然不明瞭のものとして存在して居ります。そこで多少これに注意した人々が種々なる名稱を下して無意識、副意識、潜在意識など、呼んで居ります。斯

潜在意識の實
在

二六

く種々に名づけられたる精神能力の實在することは今や疑ふこと能はざる程に至りましたのみならず、近時に至つては、愈々其重要な價值を認められて來ることとなりました、但し只今では此能力の活動法則や本質等は明白に解つて居りませんから、理論上これを否認する人もありますけれども、然し我々の心の奥底から起り來る實際の活動を試験する時には、全くこれを度外視することが出來なくなりました、即ち我々の精神中に潜伏する一能力が實在するといふことは、いよ／＼心理學上重要な地位を占むるやうになつて來たのであります、而して此の重要な能力の發見は、在來心理學を以てたゞ單に理論的科學のやうに考へられ、言を替へていへば、たゞ學者の専門的學問のやうに思はれて居りましたものを、急に人間實際生活上改進の爲の一大武器となるに至らしめました、有名な心理學者ゼームス博士がある時の講演に、諸君もし予に向つて此趣味ある學問が實際社會に如何なる恩惠を與ふるやと問はれば、其時予は答へて言はんとす、予の觀る處を以てすれば、何等のものをも與へず」と話

二七

されたことがあるさうですが、然し今日であつたならば、博士は確に其語を取消されたでありませう、兎に角我々は從來餘り注意せられて居なかつた、此方面の能力に、重大なる價值を見出すに至りましたは、大に慶賀すべきことであります。

さて潜在意識の發現につきては、種々なる方面から觀察せられます、私はこれより順を追ふて成べく諸君の首肯し易きやうに列舉し、其活動の様を陳述して見たいと思ひます。

(一) 下等動物と潜在意識 禽獸蟲魚には、我々人間とは全く異なる、特別進歩せない能力の存すとは、一般に認められて居る所でありまして、普通に之を本能と稱して居ります、さて此本能なるものは、彼等の生活の爲には、尤も必要なものであります、これが一種の潜在意識的活動なることは否まれないのであります、獨逸の哲學者ハルトマン氏は本能に對して明快なる解釋を興へて居ります、氏は動物の本能を以て、有目的の活動であると見て居ります、然し其目的については、行動する動物をれ自身は

全く無意識に居るのであります。例へばツラウト(鱒の一種)といふ魚は常に薄暗い水中に居ることを好みますが、それは四圍の境遇と調和する爲に暗黒色となります。然し光線の通ふ所に出で來ると、忽ち透明色に變ずるのであります。尺蠖が枯枝に居ると全く其の色を枯枝にして仕舞ひます。チャメレオンといふ動物は其居所によりて自在に體色を變化さすのであります。斯の如き生理的變化は我々の到底思議すべからざる事で、如何なる大生理家も、ツマリは其動物の視覚から來るものだといふのほかに何等の説明をも與ふることは出來ません。況んや蟲魚其ものが、餌食となるを防がんに爲に、敵をくらますべき繪具を具えて居て、適當なる時に、自在に斯く變色する理由などは、尙更考へ得られないのであります。

(二)人間の機能と潜在意識。我々人間にも一定の有目的活動が行はれて居て、然も人間自は一向それを知らない事が多くあります。もし其等を強て我が意識範圍に入れやうとすると、却つてそれを引離すことゝなつて仕舞ひます。然し其活動する規律や不變の状態や、其動作の確實なる有様

は、却つて意識的行爲の不確實であり、間歇的なるに比しては、大なる差異があります。例へば我々の身體の機能は、睡眠する間も普通の如く絶へず活動して居ります。肺臓も調子よく展縮して居ります。凡の消化機關も皆活動して居ります。血液も其必要に應ずるだけは、間斷なく各部分に充たされて居ります。たとひ魔睡薬を用ゐて深く眠つた時でも、身體機能の活動は誤謬なくつゞけて居ります。斯の如く各機關が其刺激に應じて機械的に働きつゝあるを見る時、これ如何なる大能力が、覺醒の時にも睡眠の時にも、斯く一様に働かせるのであるか、又熱帯より寒帯に至るまで我々人間の必要の度合に應じて、過ちなく内部の體温を保たしむるは何者であるか、此等を考へ來る程、不思議といふの外はありません。又私等は首を動かし腕を延ばすことは何の造作もありませんが、然し其運動に於ける神經、筋肉及び骨組等には、實に込み入つたる機械的作用をなし居るのであります。私等是一向それに氣がつかない、よしや解剖學者はそれを知るにしても、斯る挺槓の理が何處から置ゑられたか、如何してこれを握み

得るやうになつたか、少しも解せられません、こゝに至ると解剖學者も解剖學を知らない者と、殆ど同一の状態であります、尙進んで我々が一層難しき行動、たとへば自轉車の上にて平均を保つて居ることや、ピアノやヴァイオリンを弾することの如き、熟練なる技藝家の手腕は、既に意識的努力の状態を越えて、所謂自然的状態に入つて居ります、言を替へて言へば潜在意識の支配の下にあらねば、斯く熟達せないといふことは何人も疑はざる處でありまじやう。

(三) 身體の組織と潜在意識、我々の身體組織は自ら中庸を保つやうに出來て居ります、疾病や負傷等に犯された時に、自ら以前の如く恢復するやうに出來て居る處を見ると、其處に不思議な働を認めらるゝのであります、動物の身體は機械的と呼ばれて居るに關はらず、矢張り自己の作用を整調するやうに出來て居ります、ある部分が缺損したり破損したりすると、暫時にそれが修復せらるゝやうに出來て居ります、又不完全の部分は他の部分で代用せらるゝやうにも出來て居ります、例へばある昆蟲は、尾

がなくなつても、再び生ずるものがあります、豚の如きは臀肉を切取つても、暫時にして補充せらるゝやうに出來て居ります、これは人間の造つた機械を修理するとは、大分異つた法則の下に立つて居ります、ある時代には、醫者や生理家等は、自然療法といふことを愚弄して居たこともありましたが、近頃は此點につき、大に眞面目に考へらるゝことゝなつて來ました、某醫學博士の説によると、薬は疾病を醫すものではない、たゞ病が蔓延せぬやう防禦するに止まるもので、癒ゆる能力は身體其ものに存して居るのであると申して居ります、そこで或醫者は謙遜して、我々は病人を慰むるのみ、病氣は自然が癒やすのである」とさへ言つた者もあります、又ある醫士は病院の壁間に、斯いふ語をかけておいたさうです、予はたゞ疵を包む神のみ之を癒し給ふ」と、面白い言ではありませんか、多數の醫者の報する所によると、病人の三分の二は、醫者の助を借らないで自分に恢復するのであるとの事であり、田舎などへ往つて見ると、醫師にかゝる機會が少いので、大抵手療治でやつて癒して居ります、先年私は某地に參

りましたが、其地方は蚊の多い處ですが、蚊に噛まれても、醫師が乏しいから、大抵石炭酸で疵口を洗ひ、綑帯をしておくと其まゝ療えて仕舞ふとの事でありました。米國のある寒村に住んで居る醫士の話に、其地方ではデフテリア、肺炎、腸チブスの如き重患でも、大抵醫者の手を借らず、自己治療をして癒して仕舞ふとは實に驚くべきことでもあります。

又疾病には大抵一定の期日がありますのみならず、人體中には疾病を防ぎ又驅逐すべき相當の能力を有して居ります。身體の作用はこれを悪くするよりは、寧ろ良くするやうに働くが普通でありまして、もし何等かの疾病にかゝれば、勉めてそれを健全に復させやうとする傾向を有つて居ります。但し自然療法は神經系統の諸機關を通じて働くやうであります。然し其行動は我々の意識に上らずして、潜在意識の働に關する者が多いので有ます。私等は少しく思を潜めて、心意の奥底に降つて見ると、其處には恢復修理の能力が旺に存在して、著しく有目的動作をなして居るのを見出すので有ます。蚯蚓の如きは二に切斷せられるも、其切られた各部分

が遂に其機關を恢復致します。匍匐蟲が足或は尾を亡くすると、新しいものを發生してそれを補ひます。斯る潜在的能力の甚だ稀なりと見らるゝ人間に於ても、負傷を癒し、害毒の蠶食を防止驅逐する爲に、種々なる方法が具はつて居るのを見ます。シヨフィールド氏の無意識的治療論といふ書中に斯いふ語があります。液が碎けたる骨の周圍に注がれ、膿腫が入り込む能はざる壁もて封せられ、新しき脈管が病める肢の中に穿たれ、痛風毒が捲曲したる腎臟管中に搾り出さるゝ云々と、又血液の白血球の整列と進向及び防毒要素が自ら醸造せらるゝことによりて、疾病の萌芽の侵入を防禦して、病氣を免れしむるやう自然に力ある働をなして居ります。又病氣の以前には、何となく苦痛あり懊惱あることも、全く病狀を逸早く報ずる豫告となつて、それに必要な休息をすゝめるのであります。又何か有害な物を身體中に入れんとする場合には、それを防いで許さないやうなる注意も致してくれます。斯いふ事實を考へて見ると、此等は神が我々人間の生命保存の爲に與へ給へる不思議の構造であるとは言ふ迄もあり

ませんが、然し單に生理上の事實から見ても、其處には不思議なる働を見認めらるゝのであります、即ち此等は潜在意識の存するを示すのみならず、精神其ものが如何に種々なる働をなして、疾病治療の爲に力を盡すかといふことをも知らるゝのであります、もし此潜在的活動なくば、我々は病氣の侵入を防ぐに、殆ど其途がなからうと思ひます、外科術は別として、一般患者の心中に、活々した意志を保たしめて、我々の身體中に賦與せられたる疾病に抵抗する力を十分發揮せしめる事は、尤も大切なことと思ひます、而してこれを爲さんには、どうしても潜在意識と共同し、其助を借りて致さねばなりません、そこでサア、ウイリアム、ガルといふ人は斯くまで痛言して居ります、曰く「醫師何するものぞ、まづ心を靜にして考へよ、機械を造りし者のみ、たゞそれを修理することを得べし」と、然らば潜在意識の共力を借るとは、如何いふことであるかといふに、今一例を引て御話致しましやう。

婦人の潜在

某婦人がある時、濁水を飲みましたが、其中に蟲の卵が澤山に居たやうに

意識的疾病的例

感じました、すると其後胸が悪くなり出して、どうやら其卵が胃中で蟲になつたやうに感じました、そこで醫者に診て貰つた所が、醫師の言ふには、水蟲の卵が胃中で解化するべき道理はない、それは貴女の迷だと申しましたが、然し彼女は如何しても、さうは考へられません、のみならず、いよいよ其蟲が胃中に殖えるやうに思つて、遂には食事も進まなくなつて床につききました、處が一人の醫者が診て、之は何か居るに相違ないから、私が丸薬をあげます、それを飲むと少しく下痢しますが、其便を検査して何か居たればお報せなさいと申しました、婦人は其丸薬を服して、便を検査して見ると、成程細長い小さい赤い蟲が澤山降りて居ります、早速醫者に其事を告げた處が、それではもう一度、嘔吐剤を上げますから試験して見なさいとの事に、飲んで嘔吐すると、其中にも同じ赤い蟲が居りましたが、大分數が減じて居ります、其後一二回尙ほ丸薬を飲みましたが、もう何にも居らなくなりました、そこで婦人の胸は晴々として、元氣もつき、食慾もついて、間もなく恢復致しました、其後醫師は其婦人に申すには、あの時貴女の胃中

には何にも居たのでは有ませんが、あなたは澤山の蟲が居ると思ひつめて居られるから、それが爲に身體を害して、食事も出来なくなつた、そこで私は其蟲を下すやうに見せて、實は丸藥の中に赤い絹絲をきざんで入れておいたのであると語りました、これは此婦人が小蟲が生たと思ふ一種の疵を潜在意識にうけましたから、其疵を除く爲には、蟲が除去せられたとの感の有たせたのであります、すなわちもう蟲が亡くなつたといふ良い感銘を潜在意識に與へますと、其力で身體はズン／＼と恢復したのであります。

(四) 心意と潜在意識、從來の人々は、心意といへば、我々の醒めて居る時の意識の活動に限つて居りましたが、それは大なる誤謬でありました、もし我々の醒めて居る時の意識許りが心意なりとすれば、我々の精神的材料の百中の九十九以上は隠伏して仕舞つて、たゞ記憶によりて喚起されるのでありますから、此範圍を知るは尤も困難なることであります、又ある念は一旦意識の下に潜伏して仕舞ふと、長く顯はれて來ないものもあり

ます、其等は何なつたのか、存在して居るものか、それが再び喚返へさるゝ場合には、其等はずのまゝの様に、新しく出づるものか、潜在意識に注意せぬ論者は想像して、斯の如き念は長く伏在したまゝにて存するのであると主張しますが、それは何の説明にもなりません、今こゝに教育ある人があつて、平素幾百萬の知識を持つて居るとしても、其知識は同時に彼の意識中には存在して居りません、もし假に紙筆を採つて、彼が實際に知り又記憶する處を、外界から何等の補助もなしに、盡く書き並べやうとする時は、自分の心裏の貯藏庫が甚だ貧弱なるに驚きまじやう、多年に修得したもの、経験した事柄も、僅かに數十頁で言ひ現はせる程で、恰も一世期間の出来事を、僅に百科全書の數頁中に記さるゝと同様の感が致しまじやう、實際考へて見ると、意識の光といふものは、精神界の一小部分より照らして居らないので、恰も暗黒の夜、茫漠たる大原野に於て僅にこゝかしこの數箇所が微光に照らされて居るやうなものであります、我々は其實我々とは縁遠い此世に住つて居るのであります、我々は一度自分

の注意を惹起したる無数の経験を觀念聯合法もて呼び起すことが出来
ますが然し又之と關係なく、別に我々の現在意識には殆ど入らざる程瞬
間的の些細の事柄や、倏忽の間に現はれて消え亡せた面影等が、一の大潮
流をなして、我々の内部に保存せられて居るので有ます、たとへば熱病の
時の譫語、溺死せんとする際に來る瞬間的の奇妙な念、夢中に小兒に立返
りたるやうな念等は、ある以前に我々の内に入り來つて、然も何等の印象
をも感せない程なる不要の印象の再現であります、コリツジといふ人の
談話中に、譫語の間にヘブライ語を立派に語り出した下女の事を話して
居りますが、此下女は以前一牧師の家に仕へて居つたので、其牧師が勉強
しつゝありしヘブライ語を、聞くともなしに耳に入れたのが發出したの
である、と知れました、すると此等の記憶は多年潜在意識の奥底に沈んで
居たのですが、然し其等は全く我々の心中より消失せまいといふが眞實
であります、されば我々の記憶は、たゞ脳髓だけには限られて居ないので
あります。

先般ある西洋雑誌に次の如き譚が掲げられてありました、ある雑誌寄書
家が、某雑誌社から依頼せられてある問題について書かうと考へたが、如
何しても良い考が出ない、其中に原稿締切の期日となつたので、今回は寄
稿が出来ないとの旨を報じてやりました、すると雑誌社から返事があつ
て、貴君の原稿は既に到着して印刷に付しつゝあるとの事に、彼は不審に
思つて雑誌社へ往つて見ると、成程自分の署名と自分の文字で書いてあ
る原稿があります、讀んで見ると、其思想には始めて接するので、ナカ／＼
旨く出来て居ります、さて最終を見ると、其原稿が夜半過に投函した事が
記してありました、すると此人は、晝間には出来ずして、夜間睡眠の中に、フ
ト起きて書き出したものであることが解りました。

ある人が一人の亞米利加土人と共にニューフォンドランドの、ある森林
中に迷ひ込み、七哩程恐ろしい旅行をしたことがありました、時は暗夜で
あつたので、顔前の危険を防ぐ爲に、兩手を顔に當てん計りにして歩んだ
さうですが、土人は臆面なく歩いて懸崖も沼池もよく知つて居るやうで、

それ等を避ける爲に、山の手の方へ上つたり、又不意の路を採つたりしましたが、少しも失敗せずしてズン／＼進んで往きます、かくて數時間の後彼は最初入つた場所から百ヤード程隔つた所へ出て來たのであります。そこで土人に問ふて、「お前は如何して、そんなことが出来るか」と言つた處が、土人は「ナニ、私はたゞ歩いて居ると足が知らすのだ」と答へたとの事であり、他語にて言へば彼の過ぐる土地の組織と、彼の足との感覺が、暗夜でも此地方の精細なる記憶を直に惹起さしむるものがあつたのであります。私が先年四國のある山村に往つて、説教會を開き、夜に入つて歸りましたが、其村の一青年は暗夜に足駄で山道をコツ／＼歩み、坂でも橋でも少しも躓きません、私は靴でありましたが、幾度か倒れやうとしました。「君はよく躓かず歩けますね」といふと、「ナニ此道は暗でも平氣です」と答へました、これも此青年の潜在的精神の然らしむる處であると感じました。

我々は時々ある人の姓名や物の名を忘れて仕舞て、少しも思出せない事

があります、如何に苦心しても、苦心すればする程出て來ないのであります、そんなら假に他の名を附けておいてそれで満足するかといふに、さうでないといふ自覺がありました、承知しません、さういふ時には暫くそれを思出すことを止めて、他の事を考へるので、すると忽然、其求めて居た名が、何の苦もなく浮んで來ます、私はある時自分の訪問すべき人の名を忘れて仕舞つて、如何しても思ひ出せない、仕方ありませんから、其まゝ捨ておいて、二三日経つて、教會で説教をしておりました途中、突出すやうに其人の名が現はれて來たことがあります、ある醫師は一人の精神病者を預りましたが、此患者は、かき亂れたる精神中にも頻に詩歌の文句を并べ立てます、其時醫師は試に此患者の記憶力が如何程になつて居るかを檢す爲に、其詩歌の語を書きとめて、其出處を確かめることに骨折りました、随分困難した結果、一句の外は盡く其出處を確かむることが出來ましたが、一句だけが如何にしても搜し當てられません、仕方なしに中止して居りました處、ある朝、彼が他の問題を考へて居る途中、何心なく足が書齋の方

四二
へ向いて、ある書物を取出して見たくなり、何の心もなく、それをくりひろげて見て居る中、彼の目は直に捜して居た文句に往き當りました。此句は彼が平生愛讀して居たるロングフェローの詩集中のものであつたのですけれども、左のみ注意すべき程のものでなかつたのですから、一向氣つかずに居つたものでありました。

潜在意識の記憶力につき、著しい實驗は、催眠状態の時にせられます。ある人を催眠にかけておいて、さて其人に向ひ、貴君が醒めた時、暫く談話した後、私がボンと膝を叩くと、貴君は斯く／＼の行爲をする」と命じておきます。勿論醒めて後に、彼は其暗示を少しも記憶して居らないやうに告げておきます。さて醒めた後暫時にして、私がボンと膝をうつと、彼は必ず暗示した通りの行爲を致します。然し其本人は何故に斯くするやは少しも知らないのです。十分に催眠に入つた時に暗示せられた事柄は、醒めての後少しも記憶しませんが、其暗示の結果は、必ず發生するのであります。然し彼を再び催眠状態に入れると、以前の催眠中に與へし暗示は詳細

の點まで、盡く喚起することが出來ます。斯の如く現在意識と潜在意識との間には、其注意が全く分離せられて居りまして、相互に獨立的であることが見とめられます。

此分離状態は、多少長く繼續する時に、一層明白に現はれて參ります。先年某心理雜誌で見た例を申し上げますと、米國の一村落到一人の傳道師が居りました。一日彼は突然何處へか姿を隠しました。處が數ヶ月經過して、其村より百哩も離れたる一都府の某商店に雇はれて居る番頭が、突然叫んで「自分は某村の傳道師である。然るに如何にして此店の番頭をして居るか」と申しました。店主は驚いて發狂したのであるまいかと調べて見た處が、別に發狂もして居りませんから、試に某村に通知して見ました處が、果して其傳道師であります。彼は何故に村を出て、都會に出で、其店に雇はれたか、又其間は何をして暮したかは、少しも記憶して居りません。餘り不思議なので、某醫博士に見せた處が、其の博士は彼を催眠に入れました。すると彼が數ヶ月間商店に居て爲した事柄は、盡く記憶して居ります。然し

天才と潜在意識

醒めると何にも知りませんが、彼には全然分離した二個の意識が存在することが確かめられました。近頃の實驗によると或人の意識は三重又は四重になつて働くのがありまして、さながら數人格并存の状態を呈して居ります。然も其一人格は他の人格を全く覺らずに居るのであります。

(五) 天才と潜在意識、思索家、著述家等が必要なる思想を涵養せんとする時、彼等の現在意識だけでは到底不可能であることを感ずる場合が屢あります。文士、バルザックは勞働して倦怠した時分が、其著作に非常なる創作力の起る時であつたといふ事です。ゲーテの「ファウスト」は、一時に書かれたものでないといふ點に、非常に卓越せる處あるを見出すのであります。「ファウスト」はゲーテの成熟時代の最も良き思想と感情を表はして居りますが、然し其中には甚だ不平衡の處があります。ある個所は、此詩人の靈能が十分に發揮せられたる偉大なる文句があるかと思へば、ある個所は至つてツマラナイと感ずる文句も存して居ります。天才ならぬ我々の著作に於てさへも、同様の經驗を有つて居ります。もし我々に一種のイン

感興なき著作及び説教

一牧師の實驗談

スピレーションが起らずして、たゞ冷淡に筆を採つた時の文は、何だか無理に押しつけたやうなものが出來て、結局ツマラヌものとなつて仕舞ひます。然し感興なるものは、問題を微細に意識的に考へる處から起つて來るものではなく、寧ろ目下の事柄に飽き、精神が他の方へ轉せんとする時心の欲する通りに任かす刹那に起るものであります。私の經驗上、説教の準備をする時、大抵早く問題を考へておきますが大抵の材料は金曜日頃までに集めておいて、さて土曜日に考へて組立てますが、時には如何苦心しても、旨く思想の纏らないことがあります。處が或時は聖書の一句に出逢ふや、忽然として思想が内部より湧き出で、恰も他人が自分に口授してくれるやうにスラ／＼と出來て仕舞ふことがあります。牧師クレブゼーといふ人は斯いふ實驗談を述べて居ります。自分が説教するに際し、自分説教する自分より一二歩隔つた所に立つて、他の人の聲を聞くやうな感を以て、或時は嘆賞し、或時は不感服の心持になる。斯いふ時分が尤も成功の時で、一度此夢幻から醒めて、自分の意識に立ち復つた時、其説教は

失敗に終つて居ると申しました。此人がある時、其話を一學者に致した處が、其學者も同様の經驗を有つて居ると告げました。それは彼が百科全書の一擔任者として、哲學上の記事を書くことを頼まれて居りましたが、いよ／＼書く段になると、非常に苦みました。如何しても思想が旨く出て來ません。書いても書いても意に満たないのであります。然し原稿はある時日までに書き上げねばならないので、彼は非常に困却しましたが、遂に仕方なしに暫時之を放棄しやうと決心しました。然るに數日の後、フト感興が湧いて來ましたから、坐つて書き初めると、論理的にスラ／＼と思想が流れ出るやうに順序よく、何等の遲滯なく、又何の苦心もなく、一氣呵成に出來上りました。彼は我に返つて、餘りに容易に出來たから、冷靜なる眼光を以て檢閲した時は、必ず夢の如き文章が出來て居るであらうと考へ、學者等の前には譚話のやうに見らるゝであらうと恐れましたが、さて出來上つて見ると、彼自己の判斷にても、又百科全書編纂委員の意見にても、之が彼の著作中、尤も優越に穩健なるものであつたとの事であります。

(六) インスピレーションと潜在意識、我々が時に難しい問題に出逢ふ時暫く熟睡することが必要であると申します。數多の人々の經驗によれば睡眠が智慧を興ふる事は疑ふべからざる事實であります。此實驗は、思索家、著述家、詩人、哲學者、技術家、小説家等、誰も有つて居る所であります。さて我々がさのみ意識的努力を要せずして、自然に豊富なる感懐を懐き、有力なる思想の發表をなすことを稱して、インスピレーションが加はつたと申します。インスピレーションとは、他の一層大なる靈力が我々の上に乘移る義を指して申したのであります。古代の詩人は之を知つて居りました。彼等は突如として發した聲を聞き、又幻象を見る場合に於て、これは自分より一層高き力に引上げらるゝ感懐を有りました。故に之を又ミューズとも稱へました。即ち記憶の女神、發明の女神の義であります。此靈能が加はると、意識的理性で努力するとは別様なる一種の感動を文章の上に與へられます。故にインスピレーションと狂氣とを屢併稱せらるゝに至つたこともあります。我々は此現象中に、まさしく潜在意識の作用を見る

のであります、斯る場合には潜在意識が現在意識と密接に聯絡して働きますから、特に潜在意識の研究の爲に好材料を與へます、天才の著作には宇宙の靈の刻印があると申します、即ち彼等の著しき處は、其宇宙的なる點にあります、彼等は一時代の爲に語りません、一地方の爲に作りません、何處へでも向き、何時にでも應ずるものを作り上げます、然し潜在意識と現在意識が、尤も密接に一致して、正しき一人格を形成して此傑作が出来たことを忘れてはなりません、但し此兩意識は分離することも出来ません、そこで心意といふものは、恰も浮いたる氷山の如きもので、波上に現はれて居る部分は、波間に沈んで居る一層大なる部分に支へられて居るやうなものであります、然し此譬喩は現潜兩意識の關係を十分に説明するものではありません、氷山は上下共に同一性質でありますけれども、兩意識の活動の間に存する性質には大に相違するものがあります、要するに萬古不易の價值ある大傑作を生せしめんには、此兩意識が適當に調和して働かねばなりません、潜在意識許りでは思想を作り出しません、潜在意

識は理性の線界に沿ふて、思想を精鍊し發達せしむるものであります、潜在意識のみを分離しておけば、夜間には夢、晝間には狂者の思想を作り出すのみであります、催眠せる者の意識は夢幻に漂つて居るやうな状態であり、潜在意識は醒めたる思想の普通傾向に従ふて往かねばなりません、技術家は睡眠中に數學的問題を解くことは出来ませんが、發明家の前に横はる種々の困難は、思想の綱を其處まで延ばす人によつて除去せられます、又小説家は其散文により、詩人は其韻文により、音樂者は其調聲により、畫家は其形狀と着色によりて、何れもインスピレーションを受けるのであります、彼等の作物の中には其普遍的なる部分と、其特殊なる才能の跡とを示します、假へばシェキスピーアは其普遍的天才と靈的眞理を直覺する能力を有して居たと共に、又驚くべき程實際的知識と精緻なる觀察力に富んで居りました、内容と外形、直覺と觀察、此兩者が旨く調和せらるゝのは、最大なる作家に於て始めて見らるゝのであります、それより以下の輩になると、一方と他方が兎角に不權衡に陥つて居ります、然しこ

に注意すべきは、潜在意識の活動が決して名譽を博するの捷徑ではないことであり、又困難なる事業の代用にもなりません。我等は疾走する以前には、まづ歩まねばなりません。然して後走らねばなりません。潜在意識が我々の事業を完成させ、又我々の爲し能はずと思ふ事柄をも爲さしむるは、まづ我々の強き努力的意識が熱心の頂點に達したる時に存するのでありますが、精神治療の修養法も又此範圍に洩れないのであります。

無意識作用

(七) 無意識作用、我々が醒めて居る時、時計か天體の運行の休徴か、其他何等かの助を借らねば、時刻の経過を正しく指摘することは甚だ困難であります。睡眠中には其趣を異にして、醒めたる意識が、到底接近し能はざる程精密に、時刻の経過を知る力を有つて居ります。假へば翌朝ある時間に起きねばならぬと決心して寝ると、必ず其時間の前後に目が醒めます。少しく練習すると、一定の時刻に目を醒ますことは左のみ困難ではなくなります。犬や馬の中には、今日は何曜日であるといふことをよく知覺し

催眠者の時間
的記憶

て居るものがあります。又雞が時刻を定めて鳴き出すことは諸君の御存の通であります。ある人が雞について實驗した話に、毎夜半十二時には必ず起きて二三度鳴き、それから再び眠るが、其時刻は十分と違へなかつたとのことでもあります。又雁や燕の如きは、其移轉の時期を、正しく認知して居るのであります。

此實驗は催眠状態中にある時間を示しておいて、覺醒の後、其爲すべきことを命ずる事によつて、いよゝゝ確めらるゝこととなりました。假令は數人の者を催眠にかけておいて、さて甲には、醒めて三十分の後に斯々の事をせよ、乙には一時間の後に斯々の事を爲せよと命じておきます。すると命せられたものは、醒めて後、其時間が來ると、必ず命せられた通りに致します。ある人は單に三百分、七百分、九百分、千六百分といふやうに、分時で暗示を與へておいて、試験致しましたが、何れも其時間が來ると暗示通りになつたとの事であり、私の經驗で、ある人を催眠に入らせ、さて、君は醒めての後、五分すれば、必ず茶が飲みたくなつて、茶碗をさがし廻ると暗示

しておきます。覚醒の後五分経つと、其人は必ず何だかソワソワして物を捜し廻るやうです。何を捜すかと聞くと、茶が飲みたいが此邊に茶碗はありませんまいかと申します。そこで貴君は誰かにさう命せられて捜すのですかと聞くと、イエ、別に左様ではありません。私がたゞ何となく飲みたくなつたのですと申しました。

先般新聞紙に斯いふ話がありました。ある人がある朝フト金子五十圓を懐に入れて散歩に出かけましたが、歸つて見ると其金子がない、何處で落したか少しも解りません。のみならず、何故に其五十圓の金子を懐にして出たくなつたか、其理由も解りません。仕方なしに警察署へ届けて出ました。處が又他のある人が同じく三十圓の金子を持ち出し之を懐にして出しましたが、それも歸る時にはもう懐にありません。不思議に思つて、それも警察署へ届けました。警官は奇怪なことと思つたので、二人の身上を調べて見ると、不思議にも此二人は、半月程以前に、某病院から退隠した人々で、然も入院中は同室の寢臺に居つたといふことでありました。それ

例
証意識作用の

から嚴重に探索した結果、其犯人は病院の其室に出入して居た男であることが判りました。それは此兩人が入院中、兩三度其男に催眠を施されて苦痛を取つて貰つたことがありました。處が退院の前、どちらも催眠にかけられて、其時に、二週間後に斯様々々の處へ、金子を持つて居て落しておきなさいといふ暗示を與へられたので、其通になつたものだといふ事があります。

ある人の實驗に、一人の催眠者に、五時二十分の後、一片の紙上に十字架をしろし、それを切出して自分の處へ持つて來なさいと暗示しておきました。勿論、覺醒の後、此事を少しも記憶せないのであります。然るに、ちやうど其時刻が來ると、彼は何となくソワソワし出して、私は何かせねばならぬ事がある、何の事だか解らないけれどもと云ひつゝ、其時刻になると紙の上に十字架を書いてそれを切出して、其命令者の處へ持つて參り、何だか馬鹿なまねをするやうでと謝りながら出したさうであります。

以上の例證にて考ふる時は、現在意識にては、一向知らず、記憶に上らない

事柄も、潜在意識に銘せられて居る時は、必ずそれが發出することは疑ない事實であります。

(八) 實際生活と潜在意識、我々はある非常なる場合には、普通以上の勇氣や力量を出だすことが屢ありますが、これは別に意識的努力を要せずして致すことが多いのであります。私の知る一婦人は、平生虚弱の人でありまして、少し睡眠が足りないといふ程でありましたが、ある時、其二人の愛兒が同時に熱病にかかりました。其時彼女は晝夜衣帶を解かずして介抱し、食事さへも満足にせなかつたのであります。が、然し愛兒の全快するまで其身體を持ちつゝけて、其後も別に何の病氣にもかかりませんでした。又私の知る人の話に、自分の村に火事がありました。折柄、男子は殆ど田島に出て往つて歸るに間に合はない程でありました。が、家々に残つて居た婦人等が、村の共同貯藏所に積み入れてあつた五斗俵を、軽々と頭にのせて運び出しました。さて火事が収まつて後には、二人しても持てない位の重さであつたので、如何してそれが運び出せ

たかとして我ながら、不思議に思つたこの事でありませぬ。

又自分の好める遊戯等に、非常に興味を有ち心を奪はるゝまでに至ると多少の疲勞や困難が何でもなくなります。狩獵を好める或人が、一人の案内者を連れて深山に獵に出かけました。終日峻悪なる坂路を上下し、時には途なき斷崖などを乗越えなどして、夜に入るまで驅け廻つて歸りましたが、少しも疲勞を感じません。もしこれが他の事であれ程山中を駆け廻つたならば、必ず途中で倒れて仕舞つたに相違ないと思ひますが、獵の面白さに氣を取られて、何ともなかつたのです。然し案内者は、狩獵はもう古臭く面白くも何ともありませんから、歸つて來ると直に疲れて寢て仕舞つたといふことでもあります。

愛する者が不意の危難にかゝつた時、實に傍人を驚嘆さす程の英雄的行爲を現はすことがあります。ある婦人が二階借をして住つて居りました。が、其隣から火を失して、自分の下の部屋は猛火にて覆はれ、階段を降ることが出来なくなりました。其時彼女は當歳許りの嬰兒を抱へたまゝ、屋根

に逃れ出ましたが、ちやうど三尺許り前に立てる電柱を目がけて猿の如く飛びつき、片手に兒をかへたまゝ、片手で柱をたぐりながら下に降りました。其早業は到底尋常の時には出来ない振舞でありました。私の知る一婦人の親戚に、二十許りの少女がありました。此少女は至つて氣の弱い性質で、とに一寸血を見るとか、負傷でもすると、直に眞蒼になる程臆病でありました。處が此少女は不幸にして腸の難患にかゝり、腹部を切開せねばならぬといふ事になりました。然し其以前から大分身體が衰へて居りましたから、麻酔剤をかけては、到底堪へ切れない。然しこのまゝで療治すると尙更苦痛である。如何したものであらうかと、醫師の相談に、此婦人は其少女に向ひ、事情を詳しく打明かして、さていふやう、お身も私も、キリスト信者であるが、キリストは昔し人間の爲に十字架の苦しさを忍びなされた。然しお身の場合は、自分の病を除いて貰ふ爲の療治であるから、キリストよりも遙に耐へ易いと思ふ、お身は決心して外科治療をうけるか」と申しますと、少女は暫時打案じて、やがて決心したるやうに

「私、このまゝで手術を受けます」と答へました。其時婦人は、手術中お身は、たゞ一心にキリストを仰いで祈つて居なさい」と命じ、醫師に其旨を告げました。然し斯様に云つたものゝ、平生臆病なる彼女であるから、如何あらんかと心配しながら、自分も次の控室にあつて、熱心に祈つて居りました。四十分程経つと手術が済んだとの報知に、手術室に入つて見ると、少女は案外笑ましげに「済みました。水を一盃下さい」と申しました。其時醫師の談に「此令嬢は、手術の間一度も苦痛を叫ばれたことなく、又身もだへ一つなさらなかつたので、大層手術が早く旨く往きました。其泰然たる様子には、實に感じ入りました」との事でありました。

場合によりては、我々が平素夢にも思はれない勇氣と沈着が湧き出づることは、右の例によつても、明に知らるゝこと思ひますが、此勇氣此沈着の由て來る處は、全く潜在意識の働と見るより他はありません。

(九) 愛と潜在意識、我々の一生中に、俄然潔い感情や、眞面目なる力が精神中に入り來つて、性格を一變せしむることがあります。其時舊き習慣は全

く脱却して、凡ての誘惑や不道德に打勝つのみならず、これまでは到底爲し難いと思つて居りました道徳行爲を、苦もなく遂行し得ることゝなります、これを稱して改心又は回心と申します、此の回心の根底には必ず潜在意識の活動がなくてはならぬことは、下編に説述する通りであります、ことに母の愛の如きに至つては、確に潜在意識より湧き出づる偉大なる勢力を認め得られます、又男女の愛に於ても、大に此點に注意を拂はねばなりません、有名なる哲學者シヨウベンハウエルは、戀愛問題につき甚だ面白く解釋して居ります、彼は純然たる愛情には、本能的潜在意識の基礎あることを認めて居ります、男女の愛は、單に道徳上よりなれる友情とは全く別のもので見て居ります、そこで彼は愛の喜悅、愛の背反、愛の犠牲及び愛より出づる罪惡までも、大に稱賛して居るのであります、全體愛といふものは、理性から來つたものではありません、社會の習慣に束縛せられないで、時には一大勢力の如く、其前にある何物をも打拂つても、其生活に入らんとする事があります、それが爲めに往々慘澹たる修羅場を描き

出すこともあります、シヨウベンハウエルは男女間に何故に戀愛が起るかといふ問題を解釋して、相愛の男女間には、世界其ものまでも相互の所有のやうになり、他の男子と婦人は、凡て彼等と關係なからしむる程他者より離ることゝなります、これは何故かといふに、宇宙の無意識が、此兩人のみが完き子を産むに適すと認め、宇宙の根底にある意志が、此兩人をして斯く愛せしめねばならぬやうにするのであると説いて居ります、此説には一面の眞理が含まれて居りますが、然し彼の所説は戀愛的選擇の法則を詩歌的に言ひ現はしたものと思ひます、私にはシヨウベンハウエルの言ふ如く、純粹なる愛には潜在意識的基礎あることを疑ひません、愛には無限の性質ありといふも之が爲であり、又愛が道理や良心とは異つて、盲目的であるといふ理由も、此邊に存するのであります、愛は我々に歡喜又は失望の祕密界を開いて居ります、愛は我々の到底説明し得られない支配力を有つて居りますが、我々がそれを支配するとは出来ません、然し、此世に生れ來らんとする完全なる小兒の爲に、相愛の男女が、宇宙の大

意志によつて強く結びつけらるゝといふ考は、チト疑問であります。男女の戀愛には肉體上の完備といふことより以上に、何物か存すると思ひます。たゞ子孫を繼續せしむる方便に、戀愛が使役せらるゝといふは餘り妥當ならぬ考であります。そは兎も角永遠まで一致せんとの情念には、必ず潜在意識的基礎を有して居るに相違ありません。されば相愛の男女には、道理にて捕捉し難い、又言語にても表はし難い一種の祕密が存して居ります。我々人間が互に相親しむといふ事實も、全く之を暗示して居りまして、男女が自ら此天稟を備へて居るからであります。此潜在的親密力なくんば、深き情交は到底起つて参りません。されば眞正の愛を生理的情慾的より、一層高尚なりと見深き道德的意義の存すと見るには、全く此點に注目せねばならぬことと思ひます。潜在意識は現在意識よりも一層純一でありますから、もし我々の中に、永久的のものがありとすれば、必ずこゝから發出して居るに相違ありません。

(十) 宗教と潜在意識、宗教と潜在意識の關係につきましては、下篇に詳述して

ありますから、こゝには其大要を陳述致します。さて何れの宗教にも、必ず理窟的でない部分があります。たとへば信仰、禮拜、默示、祈願などいふ宗教上の主要なる部分は、殆ど非理窟的であります。理論家は此非理窟的方面に對して、絶えず攻撃致しますが、宗教は執念くもそれを防禦して其存在の價値を主張するのであります。時に神祕の分子が宗教の一領分から消失しますと、必ず他の領分にそれが再現して参ります。所謂科學と宗教の衝突を來たす理由は此處にあるので、其の根底には現在意識と潜在意識の兩者を調和せねばならぬといふ必要が存して居るからであります。此問題につきましては、随分多數の人々が意見を發表し、又著書なども致して居りますが、然し之が解釋の鍵を握つて居る人は、至つて少數であります。科學者哲學者は、屢々宗教を解剖し、分析して、道理的に説明せんと企てましたが、其企圖は何時も失敗に終つて居ります。何となれば、宗教には音樂や詩歌と同じく、解剖を許さない神祕的部分があるからであります。而して此神祕的部分は、潜在意識の深い奥底より發出して居るものであります。

六二
 から、之を解剖しようとする、直に道理的神経が麻痺することゝなり、
 す、實は此點に於て宗教的信念が尊敬せられねばならぬのであります、我
 々宗教家は、單に道理的的研究で以て、宗教が成立すべしとは見とめて居り
 ません、宗教的生命の湧き來る所は、他所に存することを認めて居ります
 即ち我々有限の靈がたとひ無限の大靈の何者たることを、十分に知らな
 くとも、然しこれあるを承認して服従すべき感、罪惡を悔改するの感、孝子
 の如く此大靈に信賴するの感、此等に信仰が依存して居ることを認めて
 居ります、此等の深い情感は、言語に譯さるゝ事を嫌ひます、強ひて言語に
 譯されると、直に死んだ形式的のものとなつて仕舞ひますが、それ等が我
 々の靈的生命の爲めに有力なる要素となつて働く間は、之を驅逐して仕
 舞はんとするは、生命から神祕的要素を取去らんとするので、謂はゞ宗教
 を根本から破壊することゝなります、斯る事柄は如何して出來るもので
 はありません、それ故、ある場合には、道理の力が、随分宗教的生命を危くす
 る程壓迫することゝありますが、其際には必ず其反動が起り來ることとは

古今の宗教史上に實例を見るので有ます、而して道理上の攻撃が、長く酷
 しくつゞく程、神祕的反抗が愈々頑強に打向ひます、然も斯る衝突は、必ず
 一度はあるべきもの、争はるゝが正當であるといふ理由が、一般人種にわ
 かつた時は、結局此兩者の調和を來たす日でありましょう、然も道理が頭
 から宗教の要求を無視するならば、語を替へていへば、もし現在意識が高
 尙なる潜在意識の活動を壓抑するならば、雙方共に不幸なる結果に陥る
 ことは免れません、宗教が種々なる空想や迷信の下に立つて居ても、理性
 は之を如何ともすることが出來ません、宗教の中に此大切なる要素の存
 在を認めない間は、無益な争論の跡は何時までも絶たないと思ひます、も
 し無意識から有意識に移り行くことが、人間精神の進化なりと考へて居
 る人は、此問題に對して異なる意見を有ちましようが、潜在意識の領分に
 屬する此等の要素は、何れも根本的に永遠のものであることを信じて居
 ります、我々より見れば、此等を滅絶せんとするは、即ち進化を斷滅するに
 他ならないことゝ信するのであります。

(二) 精神治療と潜在意識、最後に精神治療に關する潜在意識の作用につきて一言したいと思ひます、潜在意識が肉體に及ぼす影響につき、人爲的に試験せらるゝ場合は催眠状態の時であります、催眠中には潜在意識に必要な分離状態が、尤も明白に認められます、全體我々の意識が生理機能に何等の變化をも及ぼさないと假定して居るは、大誤謬であります、精神の働が、直に肉體に影響するとは、普通の場合に於ても屢々目撃する處であります、此方の言づかひで、聞く者の頬を紅くする事も出来、又眞蒼にする事も出来、況んや潜在意識の働く場合には、一層銳利なる變化を來し得らるゝのであります。

もし我々にして潜在意識を巧に應用する時は、身體の溫度も昇降され、脈搏も緩急にせられます、發汗もなし得られます、腸を寛和にして、便秘も除去されます、月經を遲速ならしめ、又其時と分量をも整調することが出来、苦痛を軽減し若しくは消滅することも出来、身體の各部分が無痛ならしむることも出来、其他癬疥を治し、喘息を收め、吃音を矯

正し、不消化を癒す等の事柄も不可能ではありません、私は自己の治療法を以て幾千の人に接して見ましたが、盡く偉功を奏するのであります、私は潜在意識が神経系統全體を通じて働くことを疑ひません、これが複雑なる神経機關を通じて、我々の生理的機能に重大なる變化を與ふることを疑ひません、就中、腦髓に働く變化は一層明白に認められます、其他交感神経にも影響を及ぼすことも少くありません、之等の事實は少しく心理学と醫學の心得ある人々には、決して拒否せられない事實であります、以上説明し來つた處で注意すべき點は、潜在意識なるものは、決して病的な心状、即ちヒステリーに伴ふて起る心理状態ではないこと、であります、從來の學者中には、ヒステリー患者のみを催眠状態になし得るものと思つて居つたものであります、今日は其誤謬たることが判明致しました、潜在意識は決して病的な心状ではありません、矢張我々の心靈の健全なる一領分でありまして、現在意識よりは、一層純一にして、且善惡に感じ易いものであります、此現潜兩意識は相互に抱合して居りますが、又これを分離

六六

することも出来ず、又潜在意識は現在意識より、一層直接に生理的活動を支配しますから、夫をたゞ交感神経のみに働くものとして範圍を狭めて仕舞ふは間違であります。此意識は宗教や記憶や藝術文學等の上にも働くことは、前にも述べた通りであります。然し此意識は個人的の特長性なき、たゞ單に概括せられたる精神材料とも見られません。たとひ普通の理性より一層宇宙の大靈に近く、密接の關係を有することは疑なき處であります。けれども、其働は個人の天才中に印銘せられて居ります。又これが理性と結合して働きますが、其活動の方式は全く違つて居ります。此意識は思想を作り出たしません。然し一度材料が與へらるゝと、驚くべき機敏と巧妙をもて、目的通りに活動せしむるものであります。

そこで一步を進めて、然らば此潜在意識の本質は如何なるものか、潜在意識とは如何いふ法則にて聯關しつゝあるかといふ問題になると今日の處では、殆ど何等も解釋もないのであります。之につき、多少の哲學的に又心理學的に考究しつゝある學者もありますが、然もまだ纏まつた正確

六七

なる意見はないやうであります。たゞ英國の神學者サンデー博士が其近著「過去及現在に於ける基督論」と題する書中に、多少自己の見解を述べて居りますが、此見解もたゞ試験的に提出したものだとして謝つて居ります。然し此自身には餘程自信して發表したもので、やうでありますから、今其の大要を紹介いたします。氏の考では、我々の意識の潜在的部分は、幾多の帯に區別せられて居るやうで、此等の帯をダンクと深く降るに従ひ、其作用を了解し記述することが愈々困難になつて来る。然し其作用は、我々普通の經驗から離れて、遙に複雑なるものとなつて居る。而して其下層は上層に比しては遙に豊富で且貴重なるものとなつて居る。そこで我々の外面に映する印象を一の事實とすれば、其内面の深き所に働く思想や感情の貯藏、又は過去の思想や感情の沈澱せるものも、同じく事實と見なさねばならぬ。而して斯る沈澱せる思想感情は、綿や羊毛の如く只雜然と集合して居るのではない、相互の間には絶えず、電流のやうな作用で働いて居る。斯くして我々の尤も奥深い永久的の品性と動機が形成せられる。故に我

々の心中に存する心的要素の骨髄となる處は、全く其奥底に於ける思想感情の交互作用によるものであらう、これが即ち人格の内部に隠れたる道德的品性の本質である、然るに我々の現在意識は、恰も瓶の細い首のやうになつて居て、其細い口を、澤山の孔のあるものが覆ふて居る、故に人格の内底にあるものが意識の上に来らんとするには、必ず其孔を通過せねばならぬ、其過程は恰も濾過作用の如きものである、而して此細い首の瓶は、其底にどうしても塞くことの出来ない一の孔を有つて居る、此孔から通じ来るものが、即ち神から来るものであると論じて居ります、然しサンデー博士の此見解も、自己の想像的推測を一個の譬喩に託して説明せるに過ぎないのでありますから、實は科學上心理學上には何等の光明を與へたものではありません、要するに今日の處では潜在意識の本質を明にすることは不可能であります、たゞそれが現在意識や肉體の上に及ぼす影響の明白なることは、數多の例證によつて否む能はざることゝなつて居ります。

私は宗教家でありますから、宗教の立場から見て、潜在意識問題に大なる興味を有つたのであります、全體我々は神を認めて居ると申しますが、然し其神の本質は如何なるものであるかは全く判りません、神の本質を考究し出すと、恰も潜在意識を研究すると同一の感を生じ來ります、然らば意識の力は、全く見とめられないかといふに、物質界並に精神界に現はるゝ徴證によつて、十分に見とめられます、然し物質界や精神界に現はれたる神の力のみをたどつて、神其ものゝ本質に達することは到底出来ませぬ、其處に至ると、もはや現在意識の働を超えて、所謂直覺するといふか、靈覺するといふに他なりません、然るに直覺とか靈覺とかいふ作用には、法則がありません、説明がありません、私は此意味に於いて、神の本質と潜在意識の本質が、甚しく似通つて居ると認めました、イエスキリストは、神は愛なりと斷せられました、然し愛其ものゝ本質が矢張り不可思議千萬なもの、其根柢は潛意識に關係して居ることは前に述べた通りでありますから、神は愛なりとの説明は、神は神なり、愛は愛なりとの説明の如く、實

は神の本性質を解釋し得たものではありません、又神は良心なりといふのも同様であります、私の見解からいへば、神の本質は一大潜在意識であります、然し小なる我々の潜在意識の本質すら、判明せないのでありますから、其源泉たる大潜在意識(神)の本質を判明し得べき筈はないと思ひます、たい私は物心兩界に現はれたる現象を見て、神を認知する如く、我々の心身兩面に現はるゝ潜在的微證を見て、大潜在意識の存在するを認むるのみであります。

第四章 催眠術と其價值

潜在意識と催眠状態

前に述べたる如く、潜在意識の活動は、種々なる場合に發現いたしますが、今日の處、其完全なる状態を試験するには、催眠に入れる場合を、尤も著きものとせらるゝのであります、勿論普通の意識状態の時にも、往々心の奥底より、潜在意識の刺激がありまして、其活動を現はすことは、前回にも一寸申しておいた通りであります、純然たる潜在意識の活動が、長く同一状態にて保たれ、然も種々なる現象を現はすは、催眠の場合の外には見られないのであります、さてこゝに一言し置くべきは、近頃催眠術の流行につれて、これを一種の興行的にしたり、又た、玩弄の爲に致すやうな傾があり、随つて、其弊害も少くないのであります、ことに被術者が全く現意識を亡つて居りますから、ある施術者などは、傍人の喝采を博せんとの不心得より、被術者の品位に關するやうなことを、暗示して憚らないのであります、斯様な點からして、催眠術に對する一種の惡感情が生じ來るも、

催眠術の濫用

無理からぬ次第であります、一部の基督教信者中にも催眠術といふと、何か罪惡の一種のやうに誤解して、甚しきはこれは惡魔の働であるなど、嫌つて居るものもありますが、これ一方には、催眠現象の如何なるものかを知らずして濫りに使用すると、又他方には、催眠心理につきては、何の智識もなくして、徒に忌み嫌ふといふ兩極端より、起つた弊害で、眞理は寧ろ其中間に存するものと思ひます、即ち催眠状態は、純然たる潜在意識の状態で、これを注意して研究する時は、實に有益なる材料が得られます、元來潜在意識を起すに必要な一條件は、現在意識を收めるといふ事であり、現在意識が熾に活動して居る間は、潜在意識は起つて参りません、現在意識の收まる度に應じて、潜在意識が次第に其頭を上げるのであります、そこで沈思冥想するとか、暫時無念無想になるといふのは、畢竟現在意識を收むる手段に他ならないのであります、基督信者が時々靜なる部屋に入つて祈禱をする、其時の心狀は、矢張り現在意識を收むるに他ならないので、いくら祈禱室に居ても、商業上の事や、家事上の事に念を亂されて

潜在意識を起すに必要な一條件

居る間は、天來の靈感は享受せらるるものではありません、近頃世間に岡田式や藤田式の靜坐法が頻に行はれて居りますが、あれもたゞ深呼吸のみならず、其間に起り來る現在意識靜定の功德が大に影響するものであることを見とめます、現在意識が收まらないと、潜在意識が活現して参りませんが、其現在意識を收めて潜在意識を活動せしむるやう、人爲にて誘導する方法が即ち催眠術であります。

私はこゝに少しく催眠状態に於ける數個の實驗を述べ、次に催眠術の價値の如何を論定して、讀者の参考に供したいと思ひます、これは精神治療法に大なる關係を有するからであります、第一催眠状態にある人の意識は、全く現在意識とは別様であることであり、石を見せてこれは鼠だといへば、鼠に認め、繩を見せて蛇だといへば、蛇に見へます、少しでも現在意識の状態にある者には、到底承認の出來ない事柄も、催眠間には、全く其通りに信認するのであります、又催眠状態にある間は、現在意識の事柄は、少しも記憶して居りません、施術者が何等の暗示をも與へずして、其

催眠状態、意識は現在意識とは全く別様なり

催眠中の精神活動は著しく身體に影響す

催眠中の精神活動が力量及び性格に大影響を及ぼすこと

まゝに覺醒させて仕舞へば、催眠中の出來事は、少しも記憶して居りませぬ。斯の如く、我々の現在意識と潜在意識の間には、全く分離せられたる別々の精神活動の存することを認めるのであります。

第二、催眠中の精神活動は、著しく身體に影響を及ぼします。冷水を與へてこれを熱湯であるといつて飲ますと、口中を火傷せしめます。小石を火だといへば、其持つ手は爛れます。爾の手は固くなるといへば、其手は枯木の如くに固くなります。平素は五分間と正坐の出來ないものを催眠せしめ、數時間坐はらせた後、爾の足はしびれないと暗示をして醒ますと、少しもしびれては居りません。此の催眠間の精神活動を應用して、種々なる病氣を治する爲に、催眠治療法なるものが出來て居ります。兎に角、催眠中に働く潜在意識が、身體に及ぼす影響の大なることは、疑なき事實であります。

第三、催眠中の潜在意識活動が、力量及び性格に大なる影響を及ぼすことあります。平素弱い者が、施術者の暗示の中に、非常なる剛力を表はします。又悪癖を矯正する上にも、多大なる効果を奏します。然しながら、之を悪

催眠状態中には遠距離の事物を直覺す

用する時は、往々人間を獸類に化せしむるやうな弊も起ります。かの狐憑病、犬憑病の如きは、全く此惡しき變態活動に他ならぬのであります。潜在意識の病的活動が、現在意識に影響したる結果であります。兎に角、潜在意識が精神に大影響を及ぼすことは、現在意識の到底なし能はざる程、強いものがあります。

第四、催眠状態にある者が、潜在意識によつて、遠距離の物或は出來事を感じし、現在意識にては到底爲し能はざる一種の記憶力や、直覺力を有することであり、今日、心理學者間には、尙此不思議なる感應力については、疑問を懐いて居るものも少くありません。又これを承認する者も、何故に然るかといふ理由を明白にすることが困難であります。然し、潜在意識の働く處には、普通意識の到底爲し得られない感應力の存することは、否むべからざることとなり、又催眠中には、施術者の意志が、非常に強く、鋭く、被術者に感應する一事であります。巧なる施術者は、何の言語も姿勢も示さずして、たゞウンと其意志を注げば、被術者は、施術者の意の如

七六
くに云爲する場合もあります、これが精神治療問題に大なる関係を有して居ることは、後に申上ぐる處で御判りになると思ひます。
以上は至つて簡単に、催眠状態の精神現象を話したのでありますが、一言にいへば、催眠中の精神状態は、全然潜在意識の下に活動するものと解して差支ありません、されば今日の處では、潜在意識の實驗を正確になし得る場合は、此催眠状態の他には、甚だ少ないのであります。
然るに此催眠状態に於て潜在意識を研究する時に當り、二個の困難點に觸れます、其一は普通意識と潜在意識間の聯絡斷絶の一事で、雙方の間に大なる溝渠が横はつて居ることであり、前にも述べたる如く、現在意識の熾に働く間は、潜在意識の作用は現はれて來ないのであります、然し一旦潜在意識の活動に入ると、現在意識が消失して仕舞ひ、再び現在意識にかへると、もし暗示者の暗示のない限りは、潜在意識中の行動を、少しも記憶せないのであります、それ故他に施術者があつて、我々を指導して或は催眠状態となし、或は覺醒状態に復してくれねば、自分一人で自由に

催眠状態に入り、又覺醒状態に復るといふことは、難いのであります、又潜在意識中に活動しつゝある事柄を、同時に現在意識にて知り得るといふことも、殆ど不可能となつて居ります、故に催眠術に於ては、被術者は全然術者の意志に従がはねばなりません、自分一己で、或は潜在意識状態に入り、普通意識状態に復るわけには、参りません、もし自分一人でこれを自在になし得る方法が、明になるに至らば、定めて意識界に大なる變化を及ぼすことゝなるのであります、
然るに、世にはかの千里眼者の如く、順風耳者の如く、全く催眠状態に入らず、半ば現在意識を有しながら、然も潜在意識の活動を、現在意識へ反應せしむるものがないではありません、又かのブランセットを用ゐて、無意識的に文章や詩歌を書くが如き、或は近頃歐米に起りつゝあるオートライター（自分の手が自ら働いて遠方にある他人の思想を書き現はすの力を有する者）の如きは、矢張り此部類に入るべきものであります、又それ程著しい結果を見せないにしても、假令ば自分の左手を無痛にして、針を

刺しても感ぜないやうにする人、或は掌に火をおき、又は熱湯中に腕をさし入れて、負傷せない者の如きは、身體の其局部に、潜在意識を反應せしめ得る例であります。然し此等とても、普通一般誰にでも出来るといふわけではありません。一種特別に其が出来る人、又は修養して其處に至つた少數の人々のみに限られて居ります。

又催眠状態にある者は、純然たる潜在意識の活動を現はして居りますが、然し其有様は、全く受働的方面のみで、能働的の方面は殆どない位であります。といふ意味は、催眠中はたゞ施術者の意志に服従して仕舞つて、御前は犬だといへば犬になり、重いといへば、軽いものも重くなり、萬事は施術者の意志通りになつて、少しも自働的活動を示さないのであります。かの神通力の如き催眠中に遠隔の事柄を知る作用は、多少能働的方面を表はして居るやうであります。然しこれも術者の命令に従はねば出来ない。ので、自分一個の意志でなすといふわけには参りません。要するに催眠中の潜在意識活動は、全然消極的、受働的であります。故に施術者の立場から

催眠中の潜在意識活動は受働的なり

いへば、一旦催眠にかけて仕舞へば、其後はさのみ力を要せないので、自在に被術者を左右し得らるのであります。されば催眠術によつて病氣を癒し、悪癖を矯正するは、主として被術者の潜在意識を以て致すのであります。すから、施術者には左程、努力を要しません。たゞ暗示を旨く與へさへすれば、それで充分であります。勿論、其際と雖も、施術者が眞面目に熱心に、被術者に對する態度の必要なることは言ふ迄もありません。然し、施術者自らが、潜在意識状態に入つて、非常なる感應を與へねばならぬといふわけでもないのであります。多少眞面目の精神を以て暗示すれば宜いのであります。言を替へていへば、催眠術治療は「爾の信、爾をいやす」といふやり方でありまして、病氣の癒やさるゝは、治者よりは寧ろ被治者の信仰にあるので、被治者が癒ると信じさへすれば癒るといふ點に重をおかれて居ります。それ故ツマラナイ僧侶や修験者や野士などのする事でも、被術者に信仰ある間は、やはり立派に治する事があります。これは催眠状態にある場合と等しく、全く潜在意識活動の受働的消極的の結果といふて差支

へありません。

そこで必ず起り来る問題は、然らば被治者に信仰のない場合は如何、たとへば病氣や悪癖を癒やされんことは望むが、催眠にかゝることは忌むか、亦た、かゝらない人は如何といふ問題であります、これまでの催眠術家又は催眠治療者はこれには大いに閉口したのであります、どうも信せなければ仕方がない、催眠にかゝらねば仕方がないとして、仕方がないといふ一語で辯解しようとしたのであります、精神治療を全然被術者の信仰、即ち潜在意識の受働的活動のみに訴へて居りましたならば、其の活動の起るべき機會の與へられない時には、施術者が如何ともなす能はざるは當然の事であり、然しこれは潜在意識に對する半面の智識で、他の半面の智識を得て居ない結果であります、他の半面の智識とは、潜在意識の積極的方面を了解することであり、今この事を少しく御話申し上げます。

俗にいふ一心不乱になること、専心一意に入ること、一言にいへば精神を

一點に集注すること、こゝに非常なる力の發現を見るのであります、たとへば太陽の光線が散漫に放散せる場合には、左程の勢力をも感じませんが、一旦玻璃鏡を通じて一點に集注さると、忽ち燒燃力を起します、又電氣の如きも空間に充ちたものでありましようが、其まゝでは何等の働をも致しません、其の電氣を一點に集注せしむる装置をすると、感應が起つて互に通じ合ふことゝなります、我々の精神にも亦此状態が存するやうで、たゞ散漫にボンヤリとして居る間は、精神も一向に靈能を發揮せられませんが、それを一點に集注すると、こゝに大なる力を發して、他へ感應することゝなります、此精神集注の方法として、古來から深呼吸法、坐禪、靜坐、默禱などが採用せられて居ります、亦他人に指導せられて、此集注状態に入るが催眠術であります、然し前にいへる如く、催眠術では、自分は全然うけ目に立つて居りますから、自分の思ふ所に従つて精神を集注するわけには参りません、こゝに於てか近頃「自己催眠」の名の下に、此新方面を開拓せんとする者がありますが、私の見る所によれば、普通の催眠と精神集

注法との間には、決して同一視せられない區別があると思ひます、即ち一方は全然他者の誘導により、自分は最初から、何にも考へず、たゞ施術者の言のまに、従ひ往くのでありますが、他方は自己の精神を集注する際に、何等か一の考案を立て、おいて、それに對して、専心思念するのでありますから、少くとも自分は積極的目的を以て働きつゝあるといふ自覺は、亡くならないのであります、かの藤田氏の息心調和法の如きは、即ち其一例でありまして、催眠状態とは自ら其類を異にして居ります、私の所見からいへば、自分が自分の力で、純然たる催眠状態に入り得るかを疑ひます、自分が無念無想になるといふ一想念が存して居りますから、實は純然たる無念無想ではありません、自分が全く無念無想になつた場合は、熟睡の時でありましょう、然し熟睡状態の事を意識の上に持出すは、到底出來ないことであります、されば靜坐法にせよ、坐禪にせよ、默想にせよ、何か一點に心を集注して居ると、自ら他の想念が減退し去り、後には一想念となり來ります、此想念の上に働く潜在意識の力が、大なる感應を自他に及ぼす

のであります、然るに此精神集注は、少しく練磨すると、大抵の人々に出來得るのであります、此一想念にまで立至ると、潜在意識が活躍し來るのであります、例へば催眠状態の時、施術者がこれは冷水であると暗示して熱湯を與へましても、それで口中を腐爛致しません、然し飲む者は醒めての後には、少しも知りません、斯る暗示は全く他人によりてせられましたから、前にいへる如く、それは全く受働的状态にあるのであります、然るに自分が最初から熱湯であると認めて居るものを飲んでも、口中を爛かさなといふ想念を起さうとしても、それはナカ／＼に起きて參りません、否、熱湯は口中を負傷せしめるといふ念の方が勢力を逞ふして居ります、然しもし一心不亂に負傷せない爛れないといふ一念のみに集注し來ると、何時しか他の想念を打消して仕舞つて、飲んでも負傷せないといふ一念に達します、此自信の起つた時、其熱湯を飲んでも負傷せなくなり、其人は必ずしも催眠状態に居らなくとも、矢張り負傷は致しません、私は此自信を稱して、潜在意識活動の積極的方面と申します、これは催眠状態

自信力と其感
應

の時の消極的活動とは大に趣を異にして居ります。されば潜在意識が同じく雑念のない精神範囲に働くといふものゝ、此兩方面の別あることを忘れてはなりません。ことに此自信より來れる精神感應は、自己のみに止まらず、他人の上にも大影響を及ぼすものであります。私の所謂精神治療法の根據は、こゝに存して居るのであります。自己の精神集注の結果より得たる確信が、自分の身體に影響を及ぼすものとすれば、尙進んで此確信が他人の身體に感應せぬ理由はないのであります。假令ば自分は齒を痛めて居る、然し精神集注の結果、此齒痛を除き去るとの確信に達すると、不思議に其齒痛が除去せられます。同時に私はある人の齒痛に對して、此人の齒痛を確に除き得ると自信すると、其自信より出でたる言語動作が、彼に著しき影響を及ぼし、其齒痛が同じく取除かるゝのであります。但し此場合には患者が全く齒痛を取去らるゝといふ信仰がなくてもよろしい、たゞ施術者の方に、一種の自信が起つて來て、命令をすると、立派に除去せらるゝのであります。我々は往々、自分の意ではなかつたが、何某の精

催眠治療法と
予の精神治療
法との差異

神に動かされて之を爲したといふことを聞きますが、これは事實であります。甲の精神が強くて、自信の堅い程、乙の精神に及ぼす感應が多となり、乙は如何しても、それに化せられねばならぬことゝなります。此點から見れば普通の催眠治療法は、全然被術者の精神状態に訴へて、其効果を擧げんとするのであります。私の所謂精神治療法は、患者よりも寧ろ施術者の方に大なる確信が入るので、其自信力を以て、他に對する點にあるのであります。私は勿論催眠治療法の有効なることを認めて居ります。然し催眠術を忌嫌ふ人、不安に感ずる人には、自分の確信の感應を以てする時は、別に彼等を催眠にかくる必要もなく、覺醒のまゝにて、施すことが出來ます。から、忌嫌や恐怖の念を起さすことはありません。然し患者が覺醒して居るだけ、それだけ此方に強き自信力を要するのであります。以上私は催眠治療法と其價值とを述べ、私の精神治療法との異同を簡略に述べたのであります。茲に雙方共に大切なる武器として用ゐらるゝ者は暗示であります。そこで次に暗示效用の如何を述べたいと思ひます。

第五章 暗示

八六

暗示とは何ぞや

潜在意識の活動に必要な一條件は暗示であります。暗示とは豫じめ、斯くあるべし、又斯くなるべしと断言して、潜在意識の活動を喚起する手段であります。催眠術家は此暗示を利用して、種々なる効果を奏し得るのであります。被催眠者よりいふも、此暗示がなくては、何等の働をも表はすことは出来ません。たゞ睡眠同様の状態に居なくてはなりません。然し催眠と睡眠との差別は、一方は暗示に應じて活動を喚起しますが、他方は暗示に應ぜなまいといふ點にあります。催眠者に暗示を與へて、斯くせよといへば、其如くなし、斯くあれよといへば、其如くなりませんが、睡眠者には何等の暗示もきません、強ひて耳元で騒しく言ふと目を醒して仕舞ひます。故に暗示は催眠の場合の如き潜在意識の活動する時にのみ效用があるのであります。此暗示によつて、潜在意識が働き出せば、身體に及ぼす影響は、實に大なるものがあります。假令ば催眠状態の場合に於て

現在意識に於ける暗示

施術者が催眠者に對して「爾の齒痛は癒えたり」「爾の疼痛は去りたり」といふ、断乎たる確言を與へますと、其痛は必ず除去するのであります。又、爾は今後一滴も酒を口にせない、或は、爾の便秘は緩和して二時間後には便通を催ふすなど断言すると、必ず其效驗が現はるのであります。然し潜在意識が暗示に従ふて働くことは、必ずしも催眠の場合に限られたものではありませんが、我々が醒めて居る普通意識の場合にも、暗示の力によりて、現在意識が如何ともすべからざる一種の心狀に制せらるゝことがあります。我々の意識はそれを否定し、それを打消しながらも、然も其否定を如何しても承認せられない場合がいくらもあります。今一二例を引て申せば、今迄何とも思つて居らなかつたに關らず、フト或人から自分の身體につきて甚だ面白からぬことを聞きますと、それから何だか氣になつてならなくなる、自分は左様思ふは實につまらない事だと知りつゝも、矢張り氣にかゝつてならない、果は身體に不良の影響を來たすやうなこゝとなり、コレヲ病流行の時分には、何となく腹の心地が宜しくあ

八七

りません、又一二度妙な咳嗽が出たので、醫者に診て貰つた所が、曖昧の答をした、もしや肺患に掛つたのではあるまいかと思ふと、サアそれから何となく身體が懶くなつて仕方がない、思ひ切つて名醫の診察を請ふた所が、肺病でも何でもないと知れる、すると今迄の氣分がムツカリ變つて仕舞つて、身體が活々して來るといふやうな事實は、日常に見聞する所であり、私は只今から十數年前に、盲腸炎にかゝり、一ヶ月餘入院して養生しましたが、幸にして経過宜しく、切開せず快癒致しました、然るに退院の際、一醫師が私に忠告して、貴君は今一二年は餘程注意せなさいといけない、毎年此頃には必ず再發するの恐があるから、用心なさいと申しました、私の發病したのは十月でありましたが、果して翌年の十月に又發りました、幸にそれも重體にならず済みました、處が其翌年九月頃に至ると、私の心中に一種の不安が起つて、又十月が近づいて來た、發らねば、いゝがと心配しながら、出来るだけ食事に注意をして警戒して居るに關はらず、又十月の中旬に起りました、斯様にして數年の間は、大抵、九、十月の頃になると

腹部が如何も心地悪くて堪りません、のみならず、一旦腸を痛めた後です、から、非常に食物を注意せねばならぬと思ひました、そこで成だけ柔いものを喰べます、時に饅頭の一個位を口にして、後からあゝ悪いことをした腹の工合が悪しくならなければよいがと心配して居ると、果して心地悪くなり出します、それ故、香の物や餅類は勿論、菓子も果物も一切禁じて仕舞ひました、御飯も普通のはいけないと思つて、特別柔く、御粥の兄弟分のやうなものや、蒸パンなどを常食にして居りましたが、それでも月に兩三度は必ず腹を損じて四五日休む時もあり、ことに十月になると、身體が宜しくありません、今日から考へて見ると、悪い一種の暗示が精神を支配して、身體に大なる悪影響を及ぼしつゝあつたものと解りました、何故ならば、もし私の腸がそれ程悪いものならば、必ず十月に限つて再發すべき理由はありません、然るに何故に十月に起つて來るかといへば、最初に十月を注意せよと言はれた醫師の忠告が一種の暗示となつて、かういふ風になつたものと思ひます、其の後、其處に氣附くと共に、精神修養の結果、餘

り食物を恐れないといふ自覺を得ました、ことに五年以前から巡回傳道を致すやうになつて、到る處で食物の注文をするわけには参りませんが、随分水の變りや氣候の變りもありまして心配すれば限がありませんが、私は斷じてそれに打勝つて悪くならないといふ自信を有するに至り、何でも恐れずに食へることに致しました、勿論多食暴食は致しません、所謂腹八分目の金言を守つて、澤山には喰へませんが、然し少しも恐れませんが、其頃から腸の苦みは全く忘れて仕舞ひ、近年は無病息災で、殆ど病氣を感じたことはないのではありません、以前私の食養生の時分には、妻の如くも料理の爲に随分困つて居りましたが、此頃は何でも宜いといふ有様です、から、甚だ氣樂になつたと悦んで居ります、私自身の經驗から申しても、暗示の力の大きなことを、非常に感ずるのであります。

世には、随分日が極つて身體が悪くなつたり、又時間が極つて苦痛を感じたり、又一定の場所に至ると、不快を感ずるといふ人が、いくらもあります、或人は汽車電車に乗ると直に酔つて仕舞ひます、或人は電車汽車には酔はないが、船には甚だ弱いのであります、之と反對には汽車や電車に乗ると、非常に心持の良くなる人があります、此等は何れも精神作用の結果で、暗示の影響をうけて居ることが多いのであります、何月とか、何曜日とかの語を聞くと、必ず身體が不快になると心に極めて居る、又電車や船に乗ると、必ず酔ふと極めて仕舞ふ、斯う思ひ込んだ心が即ち暗示作用に他ならぬのであります、私は随分汽船に乗りましたが、船室でジツと坐つて居ると氣分が宜くありませんから、必ず甲板に出て、海水の浪立つて居るのを眺めて居りますか、但しは船首が上下に動揺するのを見て居ると心地が爽快になります、私は或人に此事を話した處、其人は全く私と反對で、海水や船の動揺を見て居ると胸が悪くなるから、船室でジツと臥て居るが一番宜いとの事でありました、これも同様の暗示作用と思はれます。

心理學上に強迫觀念といふことがあります、これは自分は反對しながらも、如何とも出来ない氣分なる事で、自己の意志では自己に打ち勝てない心地になるのであります、假令ば二三分毎に必ず顔をしかめねばならぬ

癖の人があります、話す時も、目をしばたゝかねばならぬ人があります、又一種の手つきをせねばならぬ人があります、腰を掛けて居る時、必ず足をコト／＼させねばならぬ人があります、自分はそんな事をするは甚だ馬鹿げた事と思つて居ながら、然も如何もさうせずには居られないのであります、此強迫観念が強くなつて來ると、狂氣じみた行動を採るに至ります、ある人は道を往くに、ワザ／＼遠廻りして往く、近道を採れば宜いのであるが、其人には其近道が取れないのであります、其近道を通ると自分の生命に關はるやうな氣がして、恐ろしくて通れないので、ワザ／＼遠廻りをして往くのであります、又或人は一定の場所ではなくては勉強が出来ない、或人は一定の向でなくては安眠が出来ない、又或人は他人の家の食事は盡く不潔のやうに感せられて、自分の家でなくては、安心して食事が出来ない、斯いふ癖のある人を數へ來れば、實に少くないのであります、俗に悪い癖だといふ、其、悪い癖なるものは、全く自分にも悪いと知りながら、如何しても制止せられない心持を指したものであります、此強迫観念が嵩

じて來ると、病的になります、ヒステリー患者が非常に人を好悪したり、ある物が如何しても欲くなつたり、甚しきは或者を殺害せねば氣が濟まないといふ心持にまで至るものがあります、處が此観念も大抵ある時に、自分の潜在意識に甚だしく悪印象をうけた、それが一種の暗示作用をなして、何時までも潜在意識中に残つて活動を起すことゝなる、そこで現在意識では如何ともすべからざる有様となつたのであります、此強迫観念は人爲的に試験せられます、即ち前にも御話したる如く催眠状態にある者に、爾は覺醒の後十分して、斯々の事をするとか、或は、私が手を叩くと必ず斯々の事をするとの暗示を與へておくと、彼は覺醒後十分たつと、必ず、何だか其通りしたくなる心地になつて來ます、又手を叩かるゝと、一種の行為をせねばならぬ氣分になつて來ます、然し自分は何故に斯る事をせねばならぬかは解りません、たい心の奥底から、さういふ氣分になつて來るのであります、これは催眠中に潜在意識がうけた暗示の發作に他ならぬのであります、思ふに強迫観念の多くは、何時か潜在意識の上に強い印象

九四

をうけた、それが暗示作用を起して發作するに外ならないのであります。私は四五歳の幼童の時分ある夕、大な牡鶏に追かけられて、お尻をつゝかされたことを記憶して居ります、これが原因になつて、今日でも大きな牡鶏を見ると、何だか氣味悪く感ずるのであります、世に雷を嫌ふ人、蚯蚓を恐るゝ人の如きは、矢張り同様の原因から來つたものでありましょう。

ある人は一度桃を喰つて下痢したことがあつた、其後桃を喰べると必ず下痢を催ふす、私はまびき菜といつて、大根の若菜の漬けたのが好物でありましたが、ある時それを喰べた後で、大腹痛をやりました、それから後は、其菜漬を食ふと必ず腹痛を致します、或人は牛乳を飲むと腹にさはるのであります、又雞卵を食つて胃を害する者もあります、此等は以前に一度下痢中毒したと感ずると、それが何時までも暗示の効用をなして、身體に影響するのであります。

以上申上ぐる如く悪い經驗や注告が暗示となつて、潜在意識の活動を喚起することになると、種々なる惡結果を持ち來たすのであります、斯様

九五

な惡結果を矯正するには、たゞ普通意識の指導のみにては、到底効を奏しません、強迫觀念は普通意識にて矯正せんとしても、到底制せられないもので、所謂病的意識として取扱はるゝ程であります、これは畢竟、病的潜在意識の影響でありますから、其矯正には其根本の潜在意識を健全の方に仕向くる方策を探らねばなりません、潜在意識の健全なる活動の爲には、以前に支配して居る惡き暗示に替ふるに、良き暗示を以てするが肝要であります。

健全なる暗示を興ふることの効果は、催眠状態の時に著しく現はれます、寢小便の惡癖や、ヒステリー症の憂鬱や、リウマチス、神経痛の如き、多年醫師の手を煩はして、さのみ効能の見えなかつた者も、數回の催眠治療によりて、全治したる例はいくらもあります、然し催眠治療の場合に於ては、患者自身が從來の惡癖や悲觀症を、自分でよい方に轉換せしむることは出來ないので、たゞ施術者の命令を待つて、始めて其効を奏するのであります、すから、自働的に自己の疾病に打勝つことは出來ません、假令ば頭痛がし

ても、齒が痛んでも自分にそれを癒す力がありません、其時は必ず施術者の許に到つて、暗示をうけねばなりませんから、甚だ不自由でもあり、不都合でもあります、然るに、もし自分が自由に潜在意識の活動を喚起することが出来て、自分に癒し得るとすれば、大變なる便利であるのみならず、實に大切なる療法となるのであります、私の所謂精神治療はこゝに重を措くのであります。

暗示は他人の上に働くのみならず、自分の上にも働くことは、既に述べた處であります、自分が自分に一種の暗示を下して、潜在意識の働を呼び起すことを稱して自己暗示と申します、我々の精神は多少、此自己暗示によりて働いて居ない場合はありません、自分には一向氣のつかない所にも自己暗示は多少影響して居るものであります、處が此自己暗示なるものが、兎角に悪い不吉な事柄に對しては、妙に勢力を有するもので、たとへば病氣とか、災厄などには、甚しき影響を及ぼします、醫師から一度肺炎カタルだと言はれると、もう結核になつたに相違ないと思つて、自分で肺結核

にして仕舞ふ、あるヒステリー患者の如きは、自分の生命は、もう一年より持たないと感じ、何故にさう感じたか其理由は解らないが、兎に角其感が一昨日と鋭くなつて、身體を瘦せさせ、食事も出来なくなる、果は床に就て起き上がれなくなり、さういふ患者は一言の奨励によつて、忽ち元氣を快復することが出来、これ等は全く自己暗示に支配せられた結果であります。

支那のある物語に、一貴婦人が過つてオタマジャクシを嚙下したと思ひました、處が其蝌蚪が腹中にて蛙になつたと感じ出しました、のみならず其蛙はダン／＼生長して腹中を飛廻るやうになつて、苦しくて堪らない種々に手を盡して見ても其蛙を殺すことが出来、後には床に就きました、醫師は斯る事の決してあるべき筈はない、それは全く貴女の氣の迷であると思つて見ても、何の效驗もありません、處が一名醫があつて診察して、いふには、如何にも、蛙が腹中に棲つて居る、これを出して仕舞へば身體は健康になる、腹中にて殺すことは六ヶ敷いから、嘔吐劑を用ひて口か

ら出して仕舞ひましようとして、烈しい嘔吐剤をくれました。婦人はそれを服した處が忽ち嘔吐を催して、激しく吐瀉した。フト見ると盤中の吐瀉物の中に一疋の蛙がピン／＼飛廻つて居ります。婦人はそれを見て、俄に胸が軽くなり、暫時にして健康を恢復したとの事でありましたが、何ぞ知らん此蛙は醫師が兼て懐にして來て、婦人の吐瀉中ツツと盤中に投げ入れたものであるとは、勿論蝌蚪を嚙んだと思つたのも間違でありますから、腹中に蛙の居る筈はありませんが、然し一旦、自己暗示で、さう思ひ込んだ以上は、如何なる名醫の理窟も、それを癒すわけには参りません。それに對する治療法は、其惡暗示を打消すべき善暗示を與ふるのみにあります。即ち蛙が出たとの暗示をうけると、其時から心が一變して、身體も壯健に恢復したのであります。

私の知る學生が斯ういふ話を致しました。自分は最初英語會話が大方出來るつもりで、ある學校の英語科に出た處が、突然立されて、教師から會話をしかけられた。其時自分はハツと思ふと、如何したものか、日頃の様子に

も似ず、一句の語も出ない、暫くドキマギして居る中に、教師は他の生徒に向つたので、其まゝ手もち不沙汰に坐つた。處が其後會話の教場に出て、自分の番になると、如何したものか、口が重くなつて十分に話せなくなつて仕舞ひ、それが習慣のやうになつて困つて居ますとの事でありました。これも自分が一度失敗すると、それが知らず／＼自己暗示となつて、又いけなくないかとの恐怖と共に己が心を萎縮させて仕舞ふので有りますが、斯いふ事實は我々の屢々經驗する所であると思ひます。又此間ある婦人に面會した處、其人は數年來便秘で困つて居て、下劑を飲まないと思つた。いとこの事でありますから、私は、それは一種の自己暗示で、下劑を飲まないと思つたと思つて居るから通じないのです。其心に打勝つたならば必ず便通が有ますと論じて、私の精神治療法を施して見ましたが、果して私が暗示の通り、其夕方に便通があつたとの事であり、私の主張する精神治療法の根柢は、こゝに存するのであります。自己の惡暗示に對するに善暗示を以てして、其惡暗示を退散せしむるにありますが、これは他人に

さうして貰ふ許りでなく、少しく修養すると、自分が善良なる自己暗示を
 使用することが出来るやうになりますから、病者はことに此修養に注意
 せらるゝならば、非常なる利益と幸福を得らるゝことゝ思ひます、いくら
 名醫にかゝり、良薬を服して居ても、自己の心が始終悪暗示に支配されて
 居る間は、其服薬も治療も、左のみ効果を奏せないと思ひます、ことに慢性
 の諸疾患は、本人がもう駄目だとあきらめて仕舞ふのが多い、これが抑間
 違つて居るので、さういふ心である間は、たとひ服薬して本腹するにして
 も、甚だ遅いのであります、之に反して、其人が精神治療の自修をすれば、假
 令ば、六ヶ月かゝる處は二三月で治し、一週間の處は、一兩日で治するこ
 とゝなりましょう、勿論、病人は決して醫薬を廢すべきではありませぬ、あ
 る一部の迷信者のやうに、醫者も薬も排斥して、唯おまじないとか御祈禱
 で療されんとするは間違つて居ります、醫薬は病氣の爲に、神が具へ給ふ
 た恢復劑であります、然し醫薬のみによりさへすれば、疾病は治するもの
 と斷じ、薬を興へていけなければ、もう望のないものと決めて仕舞ふのも、

大なる誤謬であります、患者に良薬を興ふると共に、良暗示を用ゆる時は
 其回復は必ず著しきに相違ありません、もし然らずして、たゞ服薬にのみ
 頼るならば、ある病の如きは殆ど治療すべき見込はないと思ひます、思ふ
 に將來の醫術は、必ずや此兩方面が、相共力して往かねばならぬことゝ思
 ひます。

第六章 精神の感應

1011

精神力と感應

我々は身體の實在と共に精神の實在をも認めて居ります、それと同時に精神の力といふものをも認めて居ります、大抵の宗教家は精神の力の威大なること、其感化の著しいことを常に唱道して居りますに關らず、ことに不思議なるは、それ程精神の力の威大と其感應の顯著なるを是認する人々の中にも、事實上精神の感應を承認するものゝ少いことであり、唯物論者は勿論の事、精神の實在を認むる宗教家の間に於てさへも、心靈の力の如何に絶大なるものであるかを識る人が少ないので、斯る人々は其實驗さへも致したことの無いには一驚を喫する許りであります。

精神力が物質力に打勝つこと永く世に認められず

精神力が物質力に打勝つといふが如きことも、近時に至るまでは、殆ど承認せられなかつた一事であります、例へば手を熱湯中に差入ると爛れるこれは物質の法則上、動かすべからざる事實であります、そこで一般の人々は、如何なる場合に於ても、手を熱湯に差入ると爛れない筈はないと

決めて仕舞ひました、然るにこゝに、熱湯中に手を入れても爛れない場合があるとする、大抵の人々は、それは一種の小品であつて、事實上決して左様な事があり得べき筈はないと、頭から一笑に附して仕舞ひます、それは何故かと問ふて見るに、如何に精神の力が旺盛であつても、物質法則に支配せられて居る此肉體に、左様な變化が起る道理はない、熱湯に手を入れば爛れる、及物で切れば痛むといふが生理上の自然法則であるから、如何に精神力が働くにしても、其法則に打ち勝つべき筈はない、身體は矢張り物質法則に従はねばならぬ、それにたとひ精神が強くても何等の影響を及ぼすものでないと斷言して居ります、斯いふ考への人々は、今日に於ても、醫者の注意には至極微細な點までもよく遵守し、薬は浴びる程飲みますが、然し案外に自己の精神力を注いで其病氣に打勝たうとしません、否、精神が病氣に影響するものであるとの事を承認しません、斯る人は薬餌のみが疾病恢復の唯一資料であつて、精神の力などはどうでもよいものとして居ります。

1011

自己の精神力
が他人の身體
に影響するこ
とを認めざる
人あり

又一部の人は、自分の精神が自分の身體に影響することは認めて居りますが、然し自分の精神が他人の身體に影響することを知つて居りません。斯ういふ人の考では「病氣は氣から」といつて、自己の氣分、即ち自己の精神作用に關係する事は、よく承知して居りますから、たとひ服藥養生して居ても、自分の精神がシツカリして居ないならば、身體は速に全快せない。然し此氣分なるものは、たゞ自分の身體のみに影響するもので、他人の身體にまで及ぶとは思はれない。故に自分の精神を以て大に自分の身體を好良にすることは出来るが、他人の病氣を左右する迄には至らないと考へて居ります。然し少しく考へて見ると、自己の精神と肉體の間に、一種の感應あることを許す以上は、自分の精神と他人の身體とに同じ感應であることを許さない理由はありません。もし精神が肉體とは聊も相感應せざるものならば、他人の身體は勿論、自分の身體にさへも感應せないが當然であります。然し一度自己の身體に感應あることを許す以上は、他人の身體に影響せないと斷ずるは、一種の謬見に他ならないのであります。そ

精神が他人に
感應する例證

は兎も角今日の實驗上、精神が他人の身體に及ぼす影響については、いくらも其證據が呈出せられて居ります。

最初はその氣質が甚だ相隔り居る夫婦間に於ても、二三年つれ添ふて居ると、妙に雙方の氣質が相近似して來ることは、誰も認むる處でありました。ことに筆蹟の如きは甚しく類以して參ります。又親しき師弟の間に於ても、此形跡が認められます。甚しきは其歩行身振までが、スツカリ師父に似て仕舞ふものもあります。斯る状態を指して、普通には、甲が乙に化せられたと申します。然し「化せられる」といふは如何いふ事でありませうか。是迄の解釋によると、甲が乙の傍に居れば、知らず識らずの間に、自然乙の風になつて仕舞ふのであると申します。然し苟も意識ある我々は、たゞ單に受動的に働いて居りませんから、何故に乙の風になつて來るのでありませうか。そこには今一步踏入つた解釋がなくてはなりません。これを物質界の實驗に徴するに、甲が乙に化せらるゝといふ時は、必ず乙の勢力が甲に加はつた結果、一種の變果を生せしむるの謂で、自然にさういふ風にな

化せられると
の義

つたものは一もないのであります、假令ば水が蒸氣となり又氷となる、この場合には、必ず熱氣或は寒氣がそれに加はつて、さういふ結果になることは誰も認むる處であります、全體萬物の變化には、必ず變化せしむる他の勢力が加はつて、然らしむることは申す迄もありません、然らば我々の精神が、化せらるゝといふのも、同じく他の精神力が我々の上に加はつた結果と見るが正當であります、妻が夫の氣質や筆蹟に化せられて往くといふも、實は夫の精神が妻に加はるからであり、弟子が師の風彩に化せられるといふも、師の精神が弟子に加はる結果と見ねばなりません、斯様に解釋せねば、たゞ自分の心が自然さういふ風になり往くのだといふだけでは、實は何等の解釋にもなつて居りません。

こゝに一人の大酒家があつて、一人の禁酒家と同居して居ると假定します、其時大酒家の精神が、禁酒家の精神を壓する程であると、禁酒家は何時しか其禁酒を破るに至ります、然し禁酒家の精神が、大酒家以上に強いとすると、大酒家は次第に禁酒主義に向はねばならぬやうにせられます、あ

感化の二例

る基督信者が、信仰を起して後、故郷に歸ると假定します、處が其家族は盡く佛教信者であります、其時其人の信仰の力が家族の人々以上に旺盛であると、最初は多少の衝突や反對もありますが、何時しか全家族のものを化して基督信者にして仕舞ひます、之に反して家族の信仰の力が強い時は、其人は其信仰を亡ふに至ります、斯いふ例は我々の屢々目撃する所です、有ますが、それも從來の解釋では、たゞ「化せられる」といふ語で、解釋をつけて居りましたが、何故に左様な變化を來たすかといふ理由は、何にも説明せられません、然るに近頃は、甲の精神が乙より強いと、其力が必ず乙に入つて、甲と同様の状態にして仕舞ふ、結局精神勢力の強いものが、弱いものに入つて、自分の通りにならせやうとする、これが精神の特質であることを知るに至りました、そこで我々の精神も電氣のやうに相互に通ふものと見らるゝに至りました。

此事實は催眠的試験に於て一層顯著に證據せらるゝことゝなりました、ある人を催眠状態にして後、施術者は何にも言はず、自分の手を舉げると、

催眠状態中の
感應力

催眠者も同じく目を閉ぢたまゝ其手を舉げます、肘を張ると同じく肘を張ります、熟練したる施術者になると、手を舉げなくても、たゞ心中に手を舉げると思念した許りでも、催眠者は矢張り同様に其手を舉げます、首を傾けると思念すると首を傾けます、一層熟練なる施術者は、言語に現はさず、心中にて思つた文字を、催眠者に書かし得られます、これは此方の精神が確に彼方へ感應する證據であります、但しこゝに諸君に注意し置きたきは、斯る感應のある場合は、大率潜在意識發現の時であるといふ一事であります、現在意識、ことに知識的活動の熾なる際は、全く此感應のなきのみならず、却て此感應を妨ぐる嫌があります、前に引例したる夫婦や師弟の間の筆蹟風彩等が類似し来るは、何時となく不知不識の間に生じ来るので、御互に斯く模倣しよう、斯く習得しようと思つて居る間は、其隔が遠いやうでありまして、相互が無意識(詳しくいへば潜在意識状態)の時に於て凡て斯様な感化が行はるゝものであります。

私が先年鹿兒島に参りまして、其地の一教會で働きましたが、其教會の牧

師の話に、自分の教會員に誰の膝にでも針を刺して痛たくせない男があるとの事でありまして、私は如何してそんなことが出来るやうになつたのですかと問ふと、牧師の答に、何でも其人はある時、興行物を觀に往つた處が、興行師の一人が、自分の腕に針を突通して一向痛さを感じて居らない、そこで其男は、自分も興行師のする位なことは出来るだらうと思つて、其方法を問ふて見た處が、たゞ自分が痛くないといふ一念に至つた時は、突きさしても痛くないやうになるとの事に、其人は一生懸命に痛くないといふ精神を凝らして修業しました處が、遂に突きさしても痛なくなつた、そこで非常に喜んで尙も修業する中、フト斯う考へました、それは自分の身體に突刺して痛なくなつたのであるから、他人に突刺しても痛くせないといふ信念があれば、痛くないに相違ないと思ひ、それから、他人に施して見るに、矢張り痛くない、或時其男が自分の處へ來て其話をするから、自分は笑つてそんなことがあるものかと冷評すると、それでは一つ實驗して見ましようとして、私に對つた、私は半信半疑所ではない、九分の疑

予が精神治療
は、此感應の
理を應用す

を以て居たが、驚くべし、彼は自分の膝に針を刺して少しも痛くせない、實に奇妙に感じたことがありましたとの事であり、此等は確に自分の確信が他人の身體に影響する面白い例であります。

私の精神治療は又此の感應の理を應用して實施するのでありますが、此點からしても私の治療法と催眠治療法との間に、多少の差違あるのであります、即ち催眠治療法では、患者を全然潜在意識の状態にあらしめて、それに暗示を與へて治療するのでありますから、一旦催眠状態にならしめた後は、施術者は左のみ勞力を要しません、患者の潜在意識を應用して、巧に暗示を用ゐれば其効を奏するのであります、故に此治療には患者の精神状態に九分九厘重を措いたもので、施術者はそれ程勞せずして濟むのであります、然しこゝに缺點の存することを見るのは、精神感應の理からいへば、患者の精神と共に大に施術者の精神に注意せねばなりません、或場合には患者がそれ程に信じて居らなくとも、施術者の力によりて、治療せらるゝ事が少くないのであります、これにつき私は新約聖書中に掲げ

新約聖書中に
見えたる二種
の信仰療法

ある二種の信仰治療に思ひ及んだのであります、其一は路加傳にある三十年間血漏を患へる一婦人が、イエスの衣服の裾にだに觸らば癒やされんと信じて觸れた處が、果して其病氣が癒えました、それに對してイエスは、爾の信仰、爾をいやせりと申されました、これは其治療の力は、イエスよりも其婦人の信仰に多くあつたので、申さばイエスはそれが爲に、それ程勞せられた譯ではなかつたのであります、其二は使徒行傳中に、ペテロが美の門に於て跛者を癒した時、其状態が全く相反して居りました、即ち跛者は最初ペテロに錢を乞ふたのであります、其時ペテロは暫く彼を熟視して居りましたが、忽ち、金錢は我になし、わが持つ處のものゝを爾に與へんナザレのイエスの名によりて命ず、起てと命じました、此時跛者は、最初は別にペテロから癒やして貰はんと豫期して居たものではありません。又言はれた時も半信半疑で起つたかも知れませんが、矢張り癒さるゝことが出来ました、これは跛者の信仰よりは、寧ろペテロの信仰の力が、彼を起たしめたのであります、此場合にては患者よりは、施術者の方に大なる力

が見とめらるゝのであります。理想の上からいへば、被術者、施術者共に潜在意識の状態にあつて、感應し合つたならば、尤も大なる効能が現はるゝことと思ひますが、然し雙方が斯る状態に在りながら施術すといふことは、今日の處到底出来ないことであり、そこで催眠術家は、止むなく患者を催眠状態にあらしめて、此方は現在意識のまま、巧に暗示を用ゐて治療することゝなつて居りますから、催眠にかゝらない人や、亦は暗示を用ゐることの出来ない者(たとへば嬰兒の如き)には、不可能となります。そこで私は患者の方よりも、寧ろ施術者たる自分が、傾注したる精神力を以て、彼方に感應を及ぼすといふ點に重を置き、彼方に缺乏せる元氣を此方から充たしてかゝつて、治療を施すといふ方法を可といたします。これは自分が自分の病氣に對する時にも、又他人の病氣に對する時にも、其精神の用法は同一であります。又嬰兒幼兒には、母親の精神を傾注し、其母の元氣を以て幼兒に影響せしむる様に導くので、此點が普通の催眠治療法と其趣を異にして居る處で有ます。

第七章 精神治療の方式

既にこれまでにて、精神の感應と、肉體に及ぼす影響如何を説き終りましたから、本章には、私が目下實施致して居る治療の方式を御話し申上ます。これには自修法と他人に施術する場合との兩様ありまして、少しく其方式が違ひますから、まづ自修法から先に述べ、後に他人に施す方式を述べましょう。私の方式は、多分これまでに見聞し又讀みましたるものを参考として案出したのであります。それが必ずしも完全なものとは申されませんが、私は尙注意と研究の下に、出来るだけ良法が見つからば、それに改良して往きたいと思ひますが、目下の處、私はこれが一番優れた方式と見て居るのでありますから、其つもりで御讀あらんことを願ひます。

自修法

第一、閑靜なる場所を選んで、至つて緩き深呼吸をすること、これをなすに

は、成べく身體を安易なる態度にして行ふのであります。深呼吸が生理上、身體の健康に良影響を及ぼすとは、昔時から禪學の書物などにも載つて居ります。又近頃は二木醫學博士等も科學的立脚地から説明し來られたから、今日は殆ど誰も疑ふ者はありません。さて深呼吸をするに、坐禪を組むがいか、端坐してやるがいか、又仰向になつてやるがいかといふ事については、人々によつて其説を異にして居りますが、私はどれでもいゝといふ意見であります。其等は何れも形式に他ならないので、結局は其人がやつて見て、一番安樂で愉快と思ふ態度を取るがいかと思ひます。私は最初坐禪の法に倣ひましたが、此頃は端坐致してやります。時には椅子にかゝつてやることもあります。又時には仰向の儘やることもあります。要するに安靜にして深呼吸をすることは、生理的には、腦の血が自然下へ降ることゝなり、軽く腦貧血状態を起します。それで平素セツカチな人、俗務に追はれて醒醒して居る人、又は種々の事柄に思ひ悩んで不眠症に陥つて居る人などは、腦に血を上すことが多い處から、従つて頭が熱く

頭寒足熱

なつて來て、疾病を惹起し易いのです。昔時醫家の言に頭寒足熱といつて頭部が冷え、足の暖いものを健康者として居りましたが、只今から考へて見ると、大に眞理が含まつて居ります。腦に血を集めて居る人は、概して頭が熱くて不健康であり、従つて足が冷えます。さういふ人々に限つて、身體が虛弱であると共に、神經過敏症に陥り易い。これを救ふには深呼吸をして心氣を落つけるが肝要であります。深呼吸をすると自然頭の血が下へ降りますから、頭部が涼しくなり、又下腹部に力を入れますから、腰より以下が温くなります。

深呼吸の仕方につきて

深呼吸をするには、大氣を吸ひ入れて、ウンと下腹部まで吸込む心持で腹に力を入ねばなりません。此腹に力を入れるゝ仕方に二説ありまして、かの岡田式では呼吸を吹く時にウンと腹を張るべしと教へ、二木博士や藤田式では呼吸を吹ふ時に腹を張れよと教へて居ります。私から見ると、どちらでもいゝと思ひます。それも矢張り一種の形式でありますから、自分で仕易い方を取るが一番宜しいでしょう。私は呼吸を入れるゝ時、腹に力を入

れる習慣になつて居ります。又呼吸をする時、鼻から入れて口から出すべしといふと、再び鼻から出せといふとの二説がありますが、私は鼻から入れて鼻へ出す事に致して居ります。其間、目と口は閉ぢて居るのであります。

深呼吸をするには、成べく緩和にするが大切であります。藤田式では、呼吸の仕方を三段に分けて、最初には強く努力呼吸すべしと教へて居りますが、健全なものには努力呼吸も宜しくありましようが、病人には如何かと思ひます。私のやり方は、最切から呼吸の聞えるか聞えぬ位の程度で致すことをよいと致して居ります。然し其幽かな呼吸を成べく深く致します。すると非常に心持が良く感ぜられます。私の考では坐るも呼吸するも窮屈と思ふ感のないやうにして、成べく楽な態度を取ることを以て肝要と致して居ります。

次に深呼吸をする時間は最初は五分位で、二三十回の程度で宜しいと思ひます。少し熟練して來ると五分を十分に延ばし、十分を十五分、二十分、三

同其二、一向
専念になるこ
と

十分と次第に延長して参ります。最初から長時間坐つて深呼吸をすることは、健全なものには兎に角、病人には苦痛を感じますから、徐々に延ばして往くのであります。

第二、深呼吸の態度が定まれば、深呼吸する間に、ひたすら自分の病氣を癒やすといふ觀念を一心に有つのであります。其時は所謂専念一向、他の何等の事をも思はず、たゞ患部の治癒のみに精神を集注するのであります。然し最初の數回は、旨く精神を統一せらるゝものではありません。靜坐して居ると、種々なる妄念が横合から突入つて参りまして、いゝ工合に心が纏まりません。然しやつて居る間に、次第に妄念も減退し、後には一念に入るやうになつて参ります。斯様になれば、もう占めたもので、たとへば齒痛の時、自分は靜坐して、一心にもう齒は痛くないと思念すると、痛くなくなつて仕舞ひます。負傷などで頻に痛む時にも、同じくジツト心を靜にして、痛くないと念じて居ると、殆ど其痛は去つて仕舞ひます。私は時々電車や汽車の中で、腰をかけたまゝ、四肢五體が動かないと思念し出すとも

う動かなくなり、それから手がなくなると思念すると、手の所在が判らなくなり、足がなくなると思へば、同様であります、傍から見れば、熟睡して居るやうに見えましようが、自分にはチャンと一の思念は持つて居ります、さて醒めて見ると十分許り経つたと思ふ時間は、三十分も経過して居り、まだ停留所の三四ヶ所を過ぎないと思ふに、既に十餘ヶ所も過ぎて居ります、兎に角深呼吸をしながら、一念を凝らして居りますと、自己の現意識は次第に消え去つて、潜在意識の境界に進み行くやうに導かれます、これが又治療上、尤も効果を奏するのであります。

既に言つた通り、深呼吸をして居ると、頭腦の血が自然に下へ降つて来て、軽い腦貧血を起しますが、これを心理上から見ると、心氣が落付いて、何となく、宜い心持になり、後には恍惚たる有様に進んで参ります、其時、一の事柄に精神を傾注して居ると、それが潜在意識に觸れ、來つて、結局鋭い自信を起すに至ります、岡田式の静坐法では、深呼吸中には、何にも思ふことなく、たゞ無念にて居れといふのであります、然し左様にして居る中に頻に

岡田式の静坐
中に、四肢五
體が動き出す
理由

頭を振るものが出来、手を上下に動かすものが起り、時には座中を膝にて飛び廻るものも出来、私は一度ある静坐會に出て見まして、親しく目撃致しました、さて何故にある人は頭を動かし、或人は手を上下し、或人は膝にて運動するに至るか、又左様にならぬ人もあるかといふ疑問は、随分人々の間に起つて居る問題であります、ある人は静坐中、身體の一部分の動搖するは、其人の意志の薄弱を示すもので、静坐中泰然不動の姿勢に居るものは、意志の強固を證するものであると解しましたが、私の見る所によれば、これは現在意識の問題、即ち意志の強弱問題に關係するよりも、寧ろ潜在意識の豫期作用に關係することと思ひます、静坐して居る場合に、フトある機會から、頭を動かしたくなつたので、動かした、すると自分の心中に静坐する中に、頭が動き出したからは、これは必ず頭が動くに相違ないといふ豫期を、不知不識の間に起します、其念が潜在意識に影響すると次第に鋭利になつて來て、終に頭を動かさねばならぬやうになり出したのであります、手を上下する人も、口をブツ／＼と言はす人も同様で

あります、又膝で運動する人も同様であります、膝で座中を飛び廻つた人が醒めての後の言に、自分は何も夢中でやつて居らない、膝で飛び廻ることとはよく知つて居る、止めやうと思へば止まるが、然し腹をウンと張つて居る間は、如何しても斯様にせねばならない氣になつて来る」との事でありました、こゝに至つて、私は、これも矢張り一種の暗示作用から起るものであることを看破しました、私は冥想するか、又は會堂などで起つて讚美を唱ふ節には、妙に身體が左右に振れるやうに感じます、止めやうとするよりは、さうして居る方が何だかいゝ心持であります、これも一種の豫期作用であります、其處で私は考へました、深呼吸の間には、何も思はないで居るといふわけに往かない、何も思はずに居ると、偶然に起つた動作が、暗示となつて、後には一種の習慣をなして無意味な動作を起すやうになる、岡田式が靜坐をやる人に、いろ／＼奇妙な動作が起るのは、此豫期作用の爲であると思ひます、そこで私は何にも思はないで、斯る無益なる動作の方へ潜在意識の力を取られて仕舞ふよりは、最初より一念を提起して、こ

れに精神を集法する時は、そこに大なる力を得るに至るものと思ひます、單に深呼吸のみを重視して、精神の此點に注意せないのは、まだ全く精神作用の祕密を知らない爲であると思ひます、又私の經驗によると、一念を集注するには、成べく明瞭なる局部的、具體的のものでなくてはならぬと思ひます、假令ば自分の病氣の癒ゆるやうに、といふ心念は、餘りに漠然として居ります、それよりは、齒痛をいやすとか、腹痛をいやすとか、ゼンソクを治すとかいふ、ハツキリ限られたる病氣に對してゐないと、効果が薄いと思ひます、たゞ身體を丈夫にするとか、病氣が癒やさるゝとかいふは、餘りに漠然として居ります、又一度に二も三もの心念を持つことも、集注の爲には妨となり、或人は頭痛も、發熱も、咳嗽も、一度に癒ゆるやうに、心念を持ちますが、それは却つて不結果に終ります、矢張り咳嗽ならば、咳嗽のみを治するといふ一念をこめ、それが成功すれば、次に頭痛をいやすといふ按排に、一つ／＼を思念して、かゝるが穩當と思ひます。

第三、右申す如く五分乃至十分間程深呼吸をしつゝ、一念を凝らして居る

と、自分は今此痛を去る、此疾病を軽くする、といふ一種の自信が起つて参ります。然し此自信は最初數回の間は、ナカ／＼生じて参りませんが、兎に角一念を凝らして居る者には、妙に此自信が興へられて参ります。さて其自信の生じた節、冥目しながら、ソツと病める局部を兩手にて觸ります。たとへば頭ならば頭、胸ならば胸、齒痛ならば頬に觸れます。さうして一二分間は、恰も力士が敵手に對してソツと氣合を計つて待かまへて居る如く、劍客が體をかまへて、敵に撃入らんと心を凝らして居る時の如くに、其呼吸を量り、こゝぞといふ刹那に、エツと元氣を籠めて、其局部を摩擦するのであります。静坐をして精神を統一し、自信の起つた時、さながら病魔と格闘するやうな意氣込で、ヤツと氣合つて活を入れるのであります。此氣合ふといふことが、所謂心氣を轉換せしむるに大切なる一方法であることは、こゝに申上ぐるまでもありません。エツと活を入れることは、己が意志の奥底より一種の新元氣を湧出せしむる方法で、隨つて全身の氣力を轉ずるの動力となるのであります。假令ば長途の旅をして、其足を疲らして仕

舞つて、一步も進めないと思ふ時、もう一二里を奮發すればよいといふ場合に、エツと元氣を入れると再び歩まれます。ある女學校の教師が數人の女生徒を引連れて遠足に出でましたが、途中で辨當を買ふ所もなく、又御晝仕度をすることも出来ないで、仕方なしに、歩きつゝつけた處が、午後三時頃になつて、生徒等は餓くなつてもう一步も進めないとして途上に居すわつて仕舞ひました。これには教師も大層閉口して、如何すれば可からうと心配しながら、フト袂をさぐると出立の時、持つて來たポウロ(菓子)が十個許り紙に包んで残つて居た。女教師はそれを出して、一人に一個づゝ與へて、もう一里許り往けば宿に着く。だから此ポウロで空腹をしのいで、勇氣をおつけなさいと奨勵しました。處が女生徒等は、其ポウロ一個を喰べると、忽ち空腹が収まり、元氣づいて、再び一里餘の途を歩んで宿に着したとの事であります。我々は元氣が沮喪し出すと、身體にまで影響して、自由がきかなくなり、さすが、さういふ折にエツと活を入れて元氣づけると不思議な力が心の奥底から湧いて出て、よくそれに打勝てるのであります。

す、疾病に罹つて居る者は多く元氣を沮喪させて居ります、此元氣を回復するには是非此活を入れねばなりません、さて活を入れると同時に、局部を摩擦いたします、此摩擦するといふ事が、大に治療上に關係するのであります、思ふに精神が統一して自信の起つた時には、たゞウンと元氣づいた許りで、別に摩擦法を施さなくても病氣は輕快に赴くでありましょう、催眠治療法などでは、たゞ暗示を以て療やすのみで、別に摩擦いたしません、催眠状態に居る人は、純然たる潜在意識に在るのでありますから、摩擦しても、せなくても暗示の効力には差別ないと思ひますから、これには敢て摩擦する必要はありません、私の行ふ精神治療法では、純然たる潜在意識状態にあるのではなく、半ば覺醒状態にあるのでありますから、たゞ單に氣合ふよりは、手を局部に觸るゝことが、一層其人に快癒の自覺を與へると思ひます、私の知る一人の精神の治療家は、たゞ氣合を掛ける許りで、別に患者に手を觸れません、又他の治療家は、ヤツと患者の前に堂を出すのみで、矢張り手を觸れないのであります、私の考では觸れないよ

りは觸るゝ方が快癒の感を痛切に與へると思ひます、聖書中に、手を觸なば即ち癒んとあり、又病人の體に膏油を塗つて癒やすといふ記事もあります、が、この消息を洩らしたものと思はれます

以上の説く所を概括する時は

(一) 静坐して深呼吸をなすこと (二) 専念に疾病治癒を默想すること

(三) 自信を得るまで續けること (四) 最後に氣合をかけて活を入れて摩擦すること

要するに其方式は簡略でありますけれども、旨く修養するまでは、随分忍耐と努力とが入ります、ことに精神を統一して自信を得るに至るまでは、一通りや二通では達せられませんが、思ふに何の業でも其形式は簡單であります、其堂に達するまでは、骨の折れるものであります、然し一度精神が統一せられて、自信の湧いて來るやうになれば、自信があるだけ、それだけ治療の上に成功することは、私の實驗上疑なき處であります。

他の患者に對する場合

現に自分の一身に施して見て、其效能を了知するに至りますと、自然他人に對しても同様に精神をもて感應せしむるといふ自信が起つて參ります、そこで私は他人に對する治療法をこゝに述ぶることゝ致します、これは自己治療法と略同一であります、其處に亦少しく異なつた點もありませんから、煩を厭はず再說することに致します。

患者に對する時は、彼方に深呼吸をせしめると共に、此方も同様に深呼吸を致します、患者には少くとも三四十回深呼吸をさせて、精神の落付を勉めさせると共に、一向専念に自分の病氣を癒して貰ふとの事を思念せよと命じ、此方も同じく一向専念其人の患部を癒やさんとの思念を以て向ひます、但し患者は最初の時分、誰も専念になれるものはありませんが、兎に角私と對坐して深呼吸をしながら出来るだけ其念になつて居れば、比較的多く現在意識の拘束を離るゝに至るものであります、然し施術者は、

他人に施術する時の法

目と目を見合すこと

それだけ一生懸命に精神を彼方へ集注せなくてはなりません、さて此方の自信力が極つたと思ふ頃、ソツと目を醒まし、少し坐を進めて患者の患部に手を按けると同時に、患者をして私の目を見るやうに注意せしめ、まず、それと同時に私も患者の目を注視します、これは默想の間に、彼方の精神が纏まらなかつたものを一にする爲であります、此目と目を見合せる時、もし初から彼方が戯にやつて居る者か、但しは私の施術に對して十分信念を有つて居らない人は、必ず其様子が目付に現はれます、中にはフキ出して笑ふ者もあります、斯いふ人々は、決して眞に其精神のない人であることが判りますから、中止します、若い婦人中には、戯ではないが、往々、笑ひ出す者もあります、其時私はいたく叱ります、眞面目に癒される心がなくて、癒えないからもう一度やり直す」といつて、其人を後に廻します、すると二度目には決して笑ひません、目に一種の氣色が見えて、唇が時に癒撃するものもあります、其處に至ると、全く患者の精神を我心中に握つた心地になります、其時にジツと見合ひながら機を計つてエツと氣合をか

けて、患部をすります、斯くにして私の治療法は終るのであります。治療の回数は病氣によりて其度数が違ひます、肩の凝や齒の痛位なものは一乃至二回で治します、六ヶ月以内に特發した神経痛やレウマチスの如きは數回にして全治します、然し慢性的になつたものは十數回乃至數十回を要するものもあります、全體精神治療は「おまじない」とは違つて必ず一度で癒るといふ様な斷言は出来るものではありません、疾患が如何いふ工合になつて居るかは、誰も洞察し得るものはありませんから、一寸見てナカ／＼重患だと思ふやうな疾病が二三回でスツカリ全治して仕舞ふのがあり、又一二回で癒ると思つたものが十數回も要する場合があります、ないでもありません、私の腸の痼疾は二ヶ月許りにして全治させましたが、それ以來は一度も服藥したことがなく、又腸の苦痛を覺えたことがありません。

兎に角自修するには、少くとも朝夕二回づゝは必ず實行する決心でなくてはなりません、最初は五分乃至十分、冥想して居りますが、次第に馴るゝ

に従ひ十分より十五分、二十分と思念時間を長くして往きます、と後には一時間内外はわけもなく思念せられます、時間を長くして一向専念になることが確になる程、利目の多大なるを認むるのであります。

第八章 精神治療の範圍と實驗

以上、私は精神治療の理論並に其の修養法について大略説述致しましたが、尙こゝに一個の問題が残つて居ります、それは精神が身體に及ぼす影響の著しいことは既に明白となりましたが、然し精神治療法によりて、如何なる疾病が治療せらるゝか、如何程まで効力のあるものかといふ問題であります、人間は兎角に其好む處に僻し易いもので、假令ば精神治療で病氣が治るといへば、一も精神治療、二も精神治療といつたやうに、何でも精神治療でなくてはならぬやうに考込んで仕舞ふ弊があります、これ恰も醫藥許りを依頼して居る患者が、一も藥、二も藥といふやうに、藥でなくては病氣が癒えぬと思込んで居るのと同様で、何れも極端に走つて居ると申して差支ありません、前にも申した通り、疾病はたゞ藥石のみにては不十分であります、又精神治療のみにては不完全であります、要は此の兩者が兩々相扶け相和する所に、眞實の治療法が見出さるゝのであります

す、そこで一部の人々が、精神治療をツマラヌ迷信と同様に輕蔑し去つて居るのも間違であれば、又ある輩がたゞ祈禱や冥想や呼吸法のみで、其身體が健全になると考へて居るのも間違つて居ります、私が是迄の經驗によると、疾病は醫藥と精神との共働を待つて、初めて治療の好果を奏するものと思ひます、然し其處には又彼此範圍の相異なる點を見ないではありません、かのイムマヌエル協會では、精神治療をたゞ神経系統に屬する病氣に限るとして、其範圍で治療致して居ります、然し考へて見ると、神経系統といふは、廣い意味にも狭い意味にも解せられまして、廣い意味からいへば、身體の全部には盡く神経系統が汎布せられて居て、其關係のない個所はありませんから、此意味からいへば、如何なる疾病でも、精神治療で効驗のない筈はないのであります、然し狭い意味では、普通所謂神経系統に屬する病氣といへば、腦病、ヒステリー、神経痛といふがごとき、特別神経系統に關係したものを指します、私は精神治療法が、如何なる疾病に應用するも効驗あることを信じて疑ひませんが、特に狭き

醫術と精神治療の間には特長の差あり

肺結核患者の高熱を下降せしめし例

意味の神経系統の疾病には、一層効驗あることを見とめたのであります。ある病氣は、今日進歩して居る醫學上から應用せる藥劑を用ゆることは、精神治療を施すより遙に効驗あることは申すまでもありませんが、然し他の場合にては、精神治療が却つて醫藥の達し能はざる奇効を奏することが屢あるのであります。假令は感冒にて發熱した人が解熱劑を用ゐず、精神治療によつて其熱を下降せしめ得られないこともありませんが、然し醫師の解熱劑を服する方が早く苦痛を減することゝなりましよう。又外科的手術を要するものは、精神治療よりも其手術をうけることが一層効果があると思ひます。然し斯る場合にも精神治療が全く無効とせられない例はいくらもあります。私はある時、肺結核の末期で、毎日の發熱に苦んで居る患者に逢ひました。其頃此人には醫師の解熱劑も殆ど無効になつて居りました。私は其患者の切望によつて參つたのであります。一見して到底全快の見込のない容體と察しました。咳嗽は激しく出る、痰が止め度なく出て、さうして三十九度以上の發熱の爲に苦んで居るのであり

腹痛者に施せし例

ます。私は其人の爲に兩回熱が下降するやうにとの精神治療を施しましたが、ちやうど他へ巡回に出る時でありましたから、其まゝ參ることは出来ませんでした。聞けば其人は一ヶ月許りして死にしましたが、其後遺族の人々に逢つて見た所が、あの後患者の熱が著しく下降して、非常に安樂となり、心よく瞑目しました。とて私に御禮を申されました。又ある人は甚しく肩を凝らし齒を痛めた結果、發熱して臥床して居りました。其人に施した時、肩から頰にかけて發汗し、同時に熱は去り、齒痛も止つて、其まゝ全快しました。これを以て見ると、解熱は必ずしもキニネーやヘブリン許りに限りません。精神治療の上からも其効果を奏することがあります。又ある時、某礦山に參つて、其處に働く男女の工夫に施術したことがあります。其中に一人の青年がりましたが、暴飲過食をしたものか、腹痛を起して臥て居ります。私の處へ來られませんが、私は夜分事務員と共に、其家に到り治療してやりました。所が腹痛は忽ち去りまして安眠することが出来るやうになりました。其翌朝私は再び見舞つた所が、腹の方はよいが、胸

が悪くて何にも食べられないと申します、そこで私は再び施術致しましたが、彼は兩三度グーッとオクビを出して、胸がスガ／＼しくなつたと悦びましたので、私は食事を命じて歸りました、其午後彼は勞働に就て居りました、これで胃腸に關する疾患にも精神治療は確に効能があると認めました。

以上の如き實例もありますが、然し今日精神治療が特別の働をなす場合といふはイムマヌエル協會の指摘したる如く、神経系統に屬する疾患であります、今日の如く醫學が進歩して居るに關はらず、神経系に屬する治療は甚だ不完全であります、腦病や神経衰弱や、ヒステリーの如き疾病は、醫家の尤も持餘して居るもので、藥石の効力も容易に及びません、結局はまづ温泉にでも保養さすか、氣永く時日を待てといふの他には途なきことゝなつて居ります、神経痛やリウマチズムの如き疾病も、ある程度に至ると、藥石は殆ど無効の状態となります、思ふに此等の諸症は藥石の如き物質的材料を供して治らぬではありますまいが、其効力は甚だ緩慢で

神経系に屬する疾病

喘息、リウマチス、神経痛

ヒステリー症の婦人を治療せし例

あつて、服藥してもナカ／＼に長時日を要します、處が此方面に對する精神治療の効驗は、實に顯著でありまして、中には驚く程の奇効を奏するところが屢あります、私の實驗中、多年喘息を患つて困難して居る數人の男女に接しました、毎夜咳嗽の苦しさに、或人はモルヒネ注射をやつて居ります、或人はアヘン煙草で防いで居ります、此等の人々は種々と服藥して見た結果、効驗がなかつたのであります、然るに私は此等の人々に兩三回施術し、且其後の自修法を教へておきましたが、何れも咳嗽が輕減して感謝の手紙をうけて居ります、又神経痛やリウマチズムにて手足腰等が痛んで困つて居る人々に、一回乃至數回の治療を施して、其苦痛を除去した例は數へられぬ程多數であります、あるヒステリーの一婦人は其腹中に堅い球の如きものがあつて、折々それが胸に押し迫つて來て苦痛を起します、私は其婦人に數回施して、全く其球を消滅させ、氣分が輕くなつたと感謝せられました、ある婦人は子宮内膜炎の爲に下腹部が痛み、歩むと腰が張つて困るといふので、其人に二回施した所が、これも其苦痛は全く除去

せられました、勿論其人は醫師にかゝつて居りますから、尙服薬と手當を怠らないやうにすると共に、精神的自己治療をなすべき途を教へておきました、斯様に神経系統に關した疾患には、今日の醫薬の及ばない効能を現はすことは、醫師も承認せざるを得ないのであります、其他齒痛、腹痛、咽喉痛、筋違ひ、肩凝の如き輕微症に至つては、殆ど一回乃至三四回にして全治せしめ得るは、私の數百の例によつて證明せられて居ります、要するに精神治療が神経系統に屬する諸病に、直接顯著なる効驗あることは疑ない事實であります。

内臓の病氣にも、醫師の指導の下に服薬すると共に精神治療をうけられたならば、治すべき病氣は一層早く全治することゝなるに相違ありません、私が是迄に接した人々の中に、肺病、胃病、腸病にかゝれる男女にして、殆ど其効驗のなかつたものは一人もありません、多年胃病にかゝつて惱んで居た一男子が、近頃は粥を少量に啜つて居ても、尙胸にこたへて苦しいといふので、私の處に見えました、ちやうど一週間施術致しましたが、五日

胃病患者に施
術せし例

病名不詳の患
者に施せし例

目からは三度の粥を二度にして一度は普通の飯を喫べることにせられたが、それに關はらず全く胸の痞を忘れて仕舞つたとの事であり、又或婦人は先般、妙な病氣に罹りました、突然に身體がきかなくなつたのであります、ある醫師は腦溢血であるといひ、他の醫師は脊髄病であらうといひ、今に判定がつかないとの事でありました、兎に角、身體が十分に利けないのと、手足を上下するに痛を感じて自由にならないので困つて居られました、私は其人に二回治療を致しましたが、巡回傳道中でありましたから、これにも自修法を教へておいて他に參りました、所が後に書信がありました、其後は殆ど身體の自由を恢復して、痛も全く去つたとて非常に喜んで來られました、私が大凡五年間に二千餘人に施しました實験譚を一々述べますれば、際限がありませんが、今他に其著しい數例を紹介いたします。

私の友人に牧師をして居る人があります、私がある時其地方へ巡回致した節、其牧師とある村に落合つて説教會を開くことになつて居りました、

其他種々なる
實験、一顔面
神經痛

其日に往つて見ると、其牧師は持病の顔面神経痛が起つて、信者の宅で臥て居られます、私は直に施術しました處が、二回にして癒え、其夜の集會に差支へないことゝなりました、其時其人の話に、これが發つて來た時は、普通は三十六時間安臥して手當をして居らないと治まらないが、起つて二三時間にして療えたとは不思議であると喜ばれ、私も大に感謝したのであります。

兵庫の某教會の一老婦人が、突然、胸部より肩にかけて筋肉神経痛を覺えて非常に苦んで居られた處へ、私がちやうど往き合せましたが、見舞つた時は臥た切りで、ナカ／＼一人で起臥することが出來ない程痛んで居りました、そこで同道した二人の信者に手傳つて貰つて、漸く抱き起し、さて一回施した處が、痛は九分通り去りました、翌日亦往つて尙一回致しましたが、殆ど痛はなくなつて、今日から床上げをすると悦んで居られました、勿論御醫者にもかゝり、注射もして貰つて居られたさうですが、左程の効驗もなかつたやうです、もし普通にして捨てゝおけば一週間位は臥てお

らねばならないかも知りませんでした、が、二回で全治したには私も大に感謝致しました。

大阪で私の知る婦人のリウマチスムを一人は一回、一人は二回で疼痛を去つて仕舞ひました、又私の知る一婦人が出勤して居る、ある幼稚園の小便老婆が、これもリウマチスムで、腰から足へかけて痛んで勤務に堪へられないので、苦んで居りましたが、按摩や鍼をして貰つて居ましたけれど、一向効能が見えませんが、其處で私に依頼して參りましたから、悦んで致すことにしました、其老婆は來る時は人力車に乗つて參つたさうですが、これも一回で八分通り痛は除去せられました、餘程嬉しかつたと見えて、涙をこぼして私を拜みましたには、キマリの悪い程に感じました、尙一回して全治したやうであります。

北海道天鹽知恵文の角田某氏の息女が、重き病にかゝられ、醫者も六ヶし、いとふ程になつた節、私が嘗て名寄地方に巡回した時、傳授しておいたやうにせられた處、不思議にも患者の元氣が回復して間もなく全快した、

父の角田氏は感謝の餘に、私の發刊して居る靈潮誌上に此事を載せてくれとて、其顛末を報知せられ、且自分の信ずる所感をも附記せられました。重患者に一回や二回の精神治療が果して効を奏するや否やは、疑問であります。が、兎に角本人の父からの證明には、何の反對をうつつわけにも参りません。

指の疾患

汽車、電車に酔ふ症

茨木縣に往つた時、一婦人が右の手の中指が自由に動かない、ことに裁縫などすると屈んだまゝ、伸びないのであります。これが爲に困つて居られたのですが、それも一回の治療にて屈伸自在になるやうになりました。私の知る婦人傳道師で非常に汽車や電車の嫌な人がありました。それは汽車でも電車でも乗りさへすれば、直に胸が悪くなり出して嘔吐を催ふします。夫が爲に萬止むを得ない場合の他は、滅多に乘らないのであります。が、もし乗つた場合には、目を閉ぢ口を抑へて、たゞ彼方に着するのを待つ許りでありました。私は其婦人に治療して、さて共に汽車に乗りました。が、瞑目して居ると何の事はありません。それから目を開いて始めて汽車

の窓から外を眺めたといふ位でありました。其後此婦人は電車に乗つても酔はなくつたとて、私に御禮を申されました。

夜分に手、足の痛む患者の例

東海道袋井近在で一人の農家の働き人に逢ひました。此人は晝間労働に従事して居る時は、別に異状はないが、夜分寢所に入ると右の腕が痛み出して寝られない。種々薬などを塗つて見たり、灸をすゑても見たが効驗はないとの事でありました。其處で其夜治療を致しておいて、明朝經過を知らせに御出でなさいと申しておきました。翌朝其人はやつて来て、昨夜は少しも痛まず、安眠が出来たとて悦び、尙一回の治療を乞ひました。これと大同小異の例は、私が上州沼田に往きました處、其地の教會員の娘七八歳の幼児が、これも晝は何ともないが、夜になると足が痛み出して泣くに、兩親も困つて居られず、遠方から會堂まで來られ、私の説教が濟んでの後に治療をうけました。翌日其家を訪ひました處、娘は昨夜何の痛も覺えずしてよく眠つたとの事でありました。そこで尙一回治療しておきました。後に聞けばもうそれ切り痛まなくなつたとの事でありました。

腦病の人腦衰弱の人には數百人に接しましたが、殆ど効驗のなかつたものはない位であります。岡山で一人の少女が随分永く腦の苦痛を覺えて、勉強が出来ないので歸國せんとする際、不圖私の治療をうけることゝなりました。が、數回にして腦の痛は去つて仕舞ひ歸國することを止めました。ヒステリー症の婦人には數百人に接しましたが、これも効驗の現はれないものはありません。先般私が奉天にて四五日間數人の男女に施術致しましたが、後に同地の某氏より左の如き手紙をうけました。

奉天にての實驗

前略、又精神治療に就きては寔に奇しき効驗にて、これ亦我人共に驚異感謝罷在候、御療治を願ひたる人々の内例の狂人の如くなると申すヒステリーの婦人さへ、其當座は大分に心地よく宜しかりし由にて、其他の孰れも痼疾全く治癒致したるやう申合ひ悦び居り候事に御座候云々

毒、食慾缺乏

江州長濱へ往つた時、蜂に螫された青年が、ありまして、大に痛さを感じて居りましたが、一回施術して殆ど其苦痛は去り、其まゝ参りませんでした。

下野足利にてある少女が熱病にかゝり幸に下熱しましたが、如何したものか食慾が全くなくなつて四日間絶食して居りました。聞けば何にも飲食したくないので、強てすると嘔吐を催します。醫師は飲食せしめねばならぬと申しますが、如何ともすることは出来ません。兩親は大に心痛して居りました。處へ私が参りました。治療一回にして其場で牛乳が飲み得られ、其夜は患者から進んで夕飯の請求をしたので、兩親は非常に悦ばれました。

肩の凝、頭痛、齒痛等

肩の凝は一回にして特効あること殆ど百發百中であり、うけたる人の評は肩の重石が下されたる感ありといひ、或は首と肩とが離れたやうな感をしたといふものもあります。高價な按摩賃を拂つて一時間も肩もみをさす必要は決してありません。頭痛と齒痛は一回乃至三回で全治します。火傷の如きも輕症なものは一回で其痛は亡くなり、負傷も同様であります。但し外科術を要するものは、相當なる外科治療を受くべきは勿論の事であり、ます。

二千餘人に施したる實驗と成績一々こゝで御話申上ぐれば際限がありませんから、まづこれ許りにしておきます。

前にも申した通り私は此數年間全國を巡回して、往く所々に於て、之を試みました。勿論宗教家は人々の心靈に關して鼓舞慰安を與へるのが本職であります。が、さりとて心靈の慰安を與へさへすれば、身體の方は少しも氣に止めてなくても差支ないかといふに、ナカ／＼左様ではありません。人間の希望は、心靈の救済を希ふと共に、身體も健康を切に望んで居ります。此二の希望は人間衷心からの願であります。たとへばこゝに一人あつて病氣の爲に苦んで居るとする、私は其人に宗教上の慰安を説いて、病氣の中にもよくそれに堪へ得るやう勤めます。其人も私の傳道によつて、心靈の平安を得て病苦に堪へますが、然しそれが爲に其病氣を無頓着視するに至りません。たゞ癒ゆる時が來たらねば癒えないとあきらめて仕舞つて、堪へて居る許であります。から、謂はゞ其人の平安は消極的であり、ます。然るに、もし其人に對して、醫藥を服すると共に、かういふ精神修養を

して御覽なさい。貴君の病氣が二ヶ月かゝる處は一ヶ月で癒えて仕舞ふ、又醫藥で去らなかつた苦痛が除去せられて仕舞ふ、其仕方は斯様々々である。と教へて、多少にても軽減するか退却する途を示すと、病人の心持は大に違つて來ます。そこでたゞ消極的に斷念して居れといふよりも、積極的に癒えるといふ元氣をもたらす來るは、病人の爲に實に幸福なることと思ひます。されば一方醫師の治療を仰ぐと共に、他方に精神治療を施すことは、患者に對して彼此衝突するものではありません。否、却つて此兩者は相待ち相援けて往かねばならぬことを深く信するのであります。そこで前にも申した如く、精神治療さへすれば、如何なる疾病も盡く全治するものと思ふは間違であります。醫師の治療が盡く無効であるかのやうに考ふるのも誤謬であります。ある精神治療家や一種の基督信者などの間に、無暗に醫師を攻撃したり、藥を飲むは罪惡であるなど、唱へて人々を謬らしむるのは大なる惡弊であります。精神治療の本領は、醫藥と相待つて患者の苦痛疾患を速に取去るに盡力するのみならず、醫術の及ばない

範囲に立入つて、其働を示すにあらざるのであります、これが目下私が精神治療法を宣傳せんと欲する立場であります。

こゝに一言申上げておきたい事は、近頃我國にも肺病患者が次第に増加して甚だ憂ふべき現象であります、醫師の説によると、其肺患者の中に、青年の頃に發病したものゝ十の七八は死亡するが、四十歳以後に出たものは、容易に死なない、時には七八十の齡を有つに至るものもあるとの事であり、私はこれは如何いふ理由であるかを考へて見ました、常識からいへば、青年は身體の發育の眞最中であるから、たとひ肺患に犯されても容易に倒れぬ筈である、之に反して老人となれば、體力が衰へて居りますから、肺患にでも罹れば早く死すべき道理であります、然るに事實はそれと反對して居るといふは如何いふものでありましょうか、それには生理上、何等かの理由もありましようが、私の見る所にては、これは生理上よりも寧ろ精神に關して居る所が多いと信じます、元來青年時代は希望に充ち、前途大に爲すあらんと、の抱負を懷いて居ります、然るに一朝不治の

難患にかゝつて、もう仕方がないといふ一大打撃を精神上にうけます、一旦肺病にかゝると、もう全快は難いと早合點して、それが爲に今迄の抱負をメチャ／＼に壊されて仕舞ふと共に、全く失望と悲觀に陥ります、此失望悲觀の心狀が、青年の身體に大なる悪影響を及ぼすのであります、即ち心配すると熱が出る、熱が出ると、それだけ肺病が悪くなつて來る、況んや非常なる失望悲觀は、確に肺部に大悪感化を及ぼして、バタ／＼と倒れて仕舞ふので、申さば青年肺患者の多數は氣死するのであります、所が老人になつて見ると、もう自分は何時死でもかまはないと、高をくゝつてノンキに養生して居る、餘り苦悶をせない、それが爲に肺部に悪影響を及ぼさない、それで比較的永存するのであります、私は此見解を二三の醫師に話して見ました所が、何れも左様であらうとの意見でありました、然らば一旦肺患にかゝつて悲觀失望して居る者を、如何にせば元氣附けらるゝか、私は答へて、これ一は宗教の力、尙一は精神治療法の修養にあると思ひます、彼等に對して宗教的の慰安を與へて、其心を光明に導くことも大切

であります。それが共に斯いふ風に精神を修養せば大に病魔に打勝ち得らるべしといふ方法を示すことが、一層大切であります。少くとも私の精神治療法は、其點に大なる効績を挙げ得べしと信じて居ります。

第九章 精神治療と宗教道德問題

精神治療に對する二謬見

精神治療法に關する私の考説と其實験とは大略講述致しましたから、こゝに私が宗教家としての立場より、精神治療に關して如何なる見解を取つて居るかを陳述致します。初にも申上げました通り、從來、此精神治療につきては、謬つたる二個の見解から觀察せられて居りました。其真相が明になつて居りませんでしたのみならず、それが宗教上の真理と如何程の關係あるやにつきても正當に判斷せられて居りません。即ち一方には、精神治療を、たゞ無暗滅法に宗教的範圍に引入れて、御大師様の御利益であるの、何神様の御助であるのと吹聴して、精神に深い能力の存する道理も解せずして、たゞ迷信的にやつて居るのであります。他教の事はさておき、文明の宗教を以て誇る基督教の中にも、かの神癒派の如きは、たゞ御祈さへすれば、病氣が癒える薬は一切飲まなくてもよいなど、殆ど一種の迷信を標榜して憚らないものもありますが、彼等の心中に立入つて見ると、

たゞ御祈すれば癒るといふのみで、如何いふ風に神の力が病者に入り來つて癒ゆるものか、或者は癒えても或者は癒えない、これは如何いふ理由であるとかいふ點に至ると、何にも理窟はないので、たゞ祈れば神様が癒して下さるといふか、癒らないものは信仰が足りないのであるといふ遁辭で済まして置きますから、御話になりません、さうかと思ふと他の一方では、たゞ深呼吸や腹式呼吸が、病氣を癒やすものゝやうに思つて、近頃は基督教者中にも、身體の健康問題、病氣問題になると、神様の方より、岡田式靜坐法、祈禱よりも腹式呼吸といったやうに固まつて、無暗に其方に熱中して居る者も少くありません、それでは深呼吸即ち神様で、實際神の力を信する點は、全くなくなることゝなります。

これについて思ひ起すことは、我國の宗教思想の大缺點ともいふべきは、一方には、多神、偶像の崇拜が盛に行はれまして、何に對しても、何を見ても少し不思議なことか、奇妙なことに逢ふと、直に神か佛にして仕舞ひたがります、迷信の甚しきは、大正年間の今日に於ても、其形跡を見るのであ

ります、さうかと思ふと他方には、少しも信仰のない人々が澤山ありまして、無論多神教や偶像教を馬鹿げたものとして信せないのみならず、宇宙に活ける靈能の神あることさへも信仰しません、天地の本源は氣であるとか、理であるとか申して、得々たる儒者風のものがあるかと思へば、物質と勢力の外には、天地に何者もなしといふ哲學者流の輩も居ます、此等の人々は事實何れも無神者であります、斯の如く我國民の一半は迷信家、他の一半は無神家となつて居りますから、其間に立てる我々基督教者は、一方に多神偶像の迷妄を警醒すると共に、他方には、無信仰家に對しては活ける唯一の神を宣傳せねばなりません、明治年間我等基督教徒が、尤も苦闘したるは、此兩方面に對する奮戦でありましたが、幸にして近頃は、大分宗教の根本たる唯一の人格神に對する思想が、我國民中にも了解せらるゝことになつて參りました、これは大に祝すべきことでありますが、然しマダ、唯一の神の宣傳には骨の折れることゝ思ひます、一言にいへば在來我國民には神に對する正しき觀念が缺けて居りましたから、それを

正當なる觀念と信仰に立ちかへらすには、ナカ／＼苦心すべき點が多いのであります。

私は精神治療の一事に對しても、又同様の感を有するのであります、一方には彼の迷信家輩が病氣の治療を、何んでも彼でも偶像の御利益と見た、い祈禱と信心さへして居れば療るやうに思つて居ります、さうかと思ふと、他方には精神上の靈働を、たゞ物理的・心理的作用位にとめて置いて、此不思議なる靈力の因て來る處を尋ね究めやうとしません、そこで我々唯一の神の辨證をなすと同様に、精神治療につきても、此兩方面の人々に對して、大に辨證する責任があります、精神治療の根源は、かの有難連のいふやうな幼稚なる迷信的解釋では満足が出来ませんが、然し又たゞ唯物説や自然的解説にても了解せられませんが、究竟其不思議なる感應は天地唯一の大靈より來るものであるとの信仰に達ねばならぬのであります、他の宗教家は知らず、基督教の牧師・傳道師が、此點を冷淡視し或は輕蔑して居るは、以ての外の事で、此點に關する正しい解釋を與へてやらねば、世

人をいよ／＼迷信と無信の深淵に陥らすことゝなるのであります。

私の考では、大凡勢力なるものは、其根底に一大靈力があつて、其處から感應し來るによつて、初めて活動するものと思ひます、たとへば此宇宙に電氣が充ちて居らずば、如何に電話機や電信機を架設しても、何の効能もありません、私等宗教家の眼よりすれば、引力も親和力も電氣力も生命力も、其他種々なる名の附いたる勢力は、凡てこれ宇宙の唯一なる靈力の發現であることを疑ひません、即ち天地の神の大能であります、然しこゝに我々の注意すべき點は、此宇宙の大能力も、たゞわけなくして感應し來りません、例へば前に述べた如く、電氣力は此宇宙に充滿して居るものであります、然し何等の裝置なくして、其電力を享けやうとする事は出来ないのであります、電光として用ゐる爲には、それに適當したる裝置をせねば、電氣は感應して參りません、電話も其通りであります、近頃は無線電信や無線電話も現はれて來ましたが、其等には矢張り十分なる裝置がなくしては感應せないのであります、たゞ電氣が宇宙に充ちて居るから

とて、何等の装置もせないうで、神に御祈禱をして、無線電信を與へ給へ、無線電話を起さしめ給へと願つて見ても何にもなりません、これにつき先般一人の神癒を信じて居る基督信者に出逢ひました、折柄其人は病氣にかゝて臥て居ります、私は其人に精神治療をして上げましょうかといへば、其人は、イヤ精神治療は人爲の事ですから、御ことはり致します、どうか私の爲に病の癒えるやうに神様に祈つて下さいとの事であり、そこで私は、それは貴君の誤見ではありますまいか、私は貴君の爲に、たゞ口で禱るよりは、神の賜たる一種の治療法を以て貴君に對する方が却つて神の御旨を爲すことゝ思ひます、左はなくして、たゞ祈禱をして見た處が何にもならないと思ひます」といふと、其人は、然し私の信仰としては、人間の爲す業で癒してもらふことは好みません、聖書に信する者は療やさるゝとありますから、私はそれに従ひますとの事であり、私は重ねて、それは御言の通りであります、其處に貴君の考と私の考との異なる處は、たとへば神は此地上に穀物を生せしめて、我々を養ひ給ふと聖書にあります、

勿論地上に穀物が生じて我らの食物となるは神の賜であります、然しこゝに考ふべきは、神が此地上に穀物を生せしめ給ふからとて、たゞ神の御手にのみ託して、我々が何等耕作の途をも考へず、農業上の知識も應用せず、たゞ神様に祈つて、どうかよい穀物を與へて下さいと祈願したからとて、神はそれに御聞にならないでしよう、地上に穀物の生育する事は、神の與へ給ふたものであります、如何すれば其穀物を尤も良く尤も多く與へられるかといふ事になると、我々の知慧と力に待たねばなりません、我々の知慧と能力を働かすだけ、それだけ神の靈力を深く享受することになるのであります、疾病平癒も其通りで、病の癒ゆるは勿論神の力であり、ます、然し如何すれば尤も早く尤も快く癒ゆるかといふ一事は、我々の知慧と力に待たねばならぬ、我々の知慧と能力とを、よく働かすだけ、それだけ神の醫療を明瞭に感受するのであります、其道を取らないで、たゞ神に祈願すれば癒えると思つて居るのは、耕作をせないうで、良い穀物を得たと祈ると同一でありますまいか」と話した事であり、基督信者中に

も、随分斯いふやうな、誤見を以て居る人も少くありませんから、まして基督信者以外の神佛に祈願して癒されるといふことを主張して居るものは、大抵此迷信に染んで居らない者はないのであります。此點から申して私は普通に稱せられて居る信仰治療派とは、大に其見を異にして居ります。私は神の醫療の力が、聖書にさう書いてあるから、何がなしに信じて居るといふのではなく、神力の廣大なることを親しく實驗して、治療の事實を信ずる方が至當であらうと思ひます。

然らば、如何いふ場合に、神の醫療の力が我々に觸れて來るかといふに、こゝに私が近頃認めたる一事は、凡て物の相感應するには、燒點を作らねばならぬといふことであります。例へば太陽の光熱は、日々地球に發射せられて居りますが、然しその熱力をもて物を燒くには、一個の玻璃を通じて燒點を作らねばなりません。其燒點に觸れたものは、必ず燒けます。これ光線を一點に集注した結果であります。これと同じく病氣に對しても、我精神を通じて癒やすべき燒點を作る時に、醫療の感應力が來るものと思ひま

燒點と感應

藥物配劑と燒點

す、醫藥にも配劑といふことが大切であります。如何なる良藥でも、無暗に澤山飲んだからとて、利くものではありません。甲の藥と乙の藥と丙の藥と適當に調合すると、其處に療やすべき燒點が出來ます。それを飲むと身體によく適するので、効驗を奏するのであります。物質の如き藥劑にしても、其配劑如何に由りては、病氣の爲にはならず、却つて害を及ぼすことゝなります。思ふに醫師が苦心して患者の疾病と體質に應じて、藥劑の配合に注意し、所謂匙加減に苦心するは、必竟燒點を作るに他ならぬのであります。精神治療に於ても、それと同様の理があります。單に精神治療といひますが、其實は我々の精神が、他人の疾患を癒すのではなくして、醫藥の場合と同じく、わが精神を燒點として、宇宙の大靈力を感應せしむるに他ならぬのであります。故に治療の根元を尋ね來れば、同じく宇宙の大靈の作用に歸せねばなりません。然し又たとひ宇宙の大靈力が存すとしても、我精神をそれに向けて一個の燒點を作らなくては、其靈力が我に感じて參りません。其燒點を作る方法としては、靜坐をなし、精神の統一を計るが

我子の病氣に
一生懸命にな
る決心

尤も必要であつて、心氣を丹田に落つけることは、即ち燒點を作るに他らぬのであります、もし之を修養せずして、たゞ口許りで祈禱をして見ても、天地の靈に觸れる筈はありません、母親が我子の病氣の爲に、一生懸命に祈りながら介抱する、其精神は自然に燒點を作りますから、其精神が醫藥と共に、其兒の病氣の爲に大なる力となるのであります、然るに世人は此理を了解せずして、たゞ大師様や觀音様が、何か特別に手を下して、癒して下さるやうに考へるのが迷信であつて、實は自分の精神を燒點にして、宇宙の大靈に觸れた結果であることを知らないものであります、基督信者の中には、大師様や觀音様の御利益といふことの迷信であることを了解して居りまして、祈禱はたゞ宇宙の神に對して爲すべきものであることを主張して居ります、成程理窟は其の通りであるとしても、深く祈禱の應驗の意味を悟らないものが多くありまして、たゞ大師や觀音に祈ることは迷信であつて、何にもならないと頭から冷罵してかゝりますが、時には大師や觀音に祈つた結果、醫藥の及ばなかつた病氣が療やされたといふことも

基督信者が病
氣平癒に對す
る誤見

迷信の眞義

ないではありません、これは如何いふ理由かと問ふと、それは何か偶然に當つたので、決して祈禱の結果ではないと打消します、それでは天地の神様に祈つて癒えた時も、矢張り偶然であつて、祈禱の結果ではないでしよるか、と反問すると、大變窮して仕舞つて、其の區別を明にする何等の辨證もなくあります、然しこれは其考方が間違つて居るからで、たとひ大師様であらうが、觀音様であらうが、其方が癒して下さるといふ一心で、自分の精神を集注して燒點を作る者には、必ず宇宙の大靈は感應して來るのであります、其感應はキリスト信者であるから、又は偶像信者であるからといふ區別はありません、其人の精神の向け様が同じければ、同じ様に感應し來るに違ひありません、たゞ偶像信者等の間違つて居る處は、其感應力が、御大師様か天神様と思つて、實は宇宙の大靈であるといふことを悟り得ない處にあります、今これを耕作に譬へて見れば、信者であるから、良く米が出来るの、不信者であるから米が出来ないといふ差別はありません、耕作の途を専心一意に勤むれば、米の發生に關しては、基督信者、偶像家の

別はありません、たゞ異なる處は、其發育の力が何處から來るかといふ事に關して、一方は下らぬ偶像や太陽の御利益のやうに思つて居るに反し、他方はこれは宇宙の大靈力、即ち神の御力によつて出來るものであると信する點にあります、然るに従來基督信者等の中には、たゞ天の神といふ名を知つて居れば、それでよいものゝやうに心得、神様はさういふ名を知つて居る者許りに、恩恵を與へ給ふて、其名を知らない者には、理非もなく、恩恵を與へ給はないやうな誤想を以て居る者も少くありませんが、それは大なる間違であつて、キリストの教の本旨をよく辨へない結果であります(馬太傳五章四十五節を參照)信仰といふものは、たゞ理窟でさう見えておく、さうしておくといふことでなく、實に天地の神に觸れる心持にあるので、言を替へていへば、天地の神に對して我心を燒點として向ける處にあります、其の點に感應し來る靈能は、人爲や、偶像でなくして、實に宇宙大靈の然らしむる所であり、私はこの意味の信仰といふ事が、將來の宗教の眞隨にならねばならぬことゝ思ひます、此信仰が身體に向けられ

たる時、そこに信仰治療(普通にいふ精神治療)が起ります、又信仰が心靈に向ふ時、こゝに悔改、回心といふが如き宗教的治療が生じて來るのであります、所謂救はるゝといふは此義に他ならぬのであります、宗教家にして此信仰の實驗なきものは、未だ宗教の奥堂に入つたとは申されませんが、自分の精神を燒點として、神靈の感應を受くる途を修むる、これが祈禱の眞髓であります、其祈禱よりして心靈に種々なる經驗を得る、これが默示、豫言、聖潔、感謝等となつて現はるゝ宗教的實驗であります、尙斯いふ點につきては、下篇信仰論を御參考あらんことを願ひます。

序に私は此精神的燒點と倫理との關係について、一言申上げておきたいと思ひます、假令ば人間が眞面目になるといふことは、己が精神を統一し、ある道徳問題に集注することであり、義務を感ずるといふも、我心を一にして、その事のみ集注する事であり、愛の作用も又此精神集注の働に他ならぬのであります、されば我々が日常、道徳の力を修養するには、勿論、現在意識を以て種々なる道徳的知識を得るとも大切であります

けれども、如何に道徳上の知識を修得したからとて、直に實踐せらるゝものではない、今日我國に於て道徳的教訓をやかましく言つて居る割合に、實踐が擧がらないのは、此集注的修業を缺いて居るからであり、現意識に受けて居る道徳的知識は、爾は斯くなすべき筈であるといふだけの事より深くは突き入りません、尙進んで、如何しても斯くなさねばならぬといふ、止むに止まれない自覺を湧出せしめません、これが後に形式的となつて仕舞ひ、いくら教へても勸めてもサツパリ効能のない事となるのであります、然るに此教訓に力あらしめるには如何にすべきかといふに、所謂精神を集注して焼點を作る修業をなさしむることであり、これが即ち沈思黙想して、一生懸命に一念になるべき修業をする必要があるのであります、かの岡田式の靜坐法を修めた人の話に、深呼吸をして無念になることは、たゞに肉體の健康を増すのみならず、精神上にも著しい變化を來たし、以前は苦しく思ひつゝ、抑制して居た性癖等に、今では苦もなく打勝つことが出来るに至つたとの事であり、全くと此眞

理をいひ現はしたものに他なりません、私の知友に斯いふ經驗をした人があります、それは使徒パウロが羅馬書の中にも、し人が神の靈をうくる時は、決して罪を犯すことなし、靈にある時は全く肉より死したるものとなるといふ意味の語がありますが、人間は果してパウロのいふやうな境界に達することが出来るものであらうか、自分は今迄に慾を制し情を矯めるに、ナカ／＼苦しい念をした、爲たい／＼と思ひながら、それをジツと耐へて居る、耐へ切れなくなる時には、止むなく神に禱つて忍耐して居るといふ、實に苦しい場合が多い、然るにパウロの説によると、神の靈に觸るゝ時は、少しも罪を知らなくなるといつて居るが、果して其様なことがあるべきであるか、これは一つ實驗して見なくてはならぬと決心して、三四箇月間、一生懸命に黙想して精神の統一を修めました、最初の間はナカ／＼、皆く精神が纏まらなかつたが、ダン／＼と練習するに従ひ、ある時確に神の靈に觸れたと感じた時が來ました、其時の心念は全く無慾無私の有様で、少しも苦い感がない、たとへば何か喰べたいといふ慾念が起る、其時イ

ヤ喰へたくないといふ念を以て沈思しつゝ其境界に入ると、どれ程珍味佳肴が前に並べられてあつても少しも喰べる氣がせない、ある場合に情慾が起きて来る、其時イヤ自分は今さういふ念を持たないと專念すると周囲の有様が如何に情慾を誘ふやうな状態であつても、少しも動かされない、成程パウロの言つた神の靈に觸るゝ時は罪を犯さずといふは、このことだなど悟つたと物語りました、これは實に面白い經驗と思ひます、我々はこれは善、これと惡と知つて居ても、さて其善をなし惡を止めやうといふ場合になると、苦しくて出来難い、百人中九十九人までは其苦しさに打負けて仕舞ふ、何が足りないかといふと、心を一にして精神に燒點を作る修養が足りない、言を替へていへば、潜在意識をもて天地の大靈に觸れ、道念を鼓舞する力量が足りないからであります、これから見ると靈魂の病氣も、肉體の病氣と同じく、たゞ教訓や規律や制裁などいふ、外來の藥石のみでは効能が少ない、こゝにも一種の精神治療が必要であることは、今迄に申上げた處で克く御解りになつたと思ひます。

此一事はたゞ自己の道徳を修養するのみに止まらず、進んで他人を教化する時にも大切であります、假令ば小兒が何か器物を玩具にして居ります、私は其小兒に對して、それを玩具にしてはいけないと注意しますが、其注意の仕方が散漫であつて、たゞ口先許りで叱つて居る中は、小兒は矢張り平氣で玩具にして居ります、所が眞に小兒の觸つてはならぬ器具がある、それに小兒が手を觸れて居ると、私は、アッ、それを觸つてはならぬと言申すと、小兒は飛上るやうに感じて、手を引込めて仕舞ひます、先には度々注意しても小兒が平氣で玩具にするにかへて、後の場合には一度で中止して仕舞ふ理由は何であるかといふに、先の場合には、私の精神が眞面目になつて銳利に感應させませんが、後の場合には、私は思はず一種の燒點を作つて一生懸命に注意する、其銳利なる力が小兒の心に觸れて眞に中止するのであります、所謂親が子に對し、教師が弟子に對して、眞に教導訓化して往かうとする節には、其の師父たる人の精神が絶えず集注して、一の燒點を作るやうでなくては眞面目がありません、たゞ口先許りで、

ヤイ／＼言つて居ても、子弟の精神には感應しません、説教者や演説家が話す中に、何となく一生懸命になつて來ると、言々句々妙に肚の奥底から湧出するやうに感ぜられて口邊へほとばしる、さういふ時の説教演説は、確に聽衆の肺膈に觸れて居ります、然るに或場合には、たゞ口先では上手に述べて居るが、一向氣乗がせない、一生懸命の力が出て來ない、書いたものを朗讀するやうで、油が乗らない、さういふ説教演説を聞かされて居る聽衆こそ迷惑な事で、其中の多數は白河夜船の高軒で居るか、但しは仕方なくイヤ／＼ながら聽いて居るといふ有様であります、要するに道德上宗教上何れにしても、彼此の精神の感應する所に、靈能が現はれますが此感應には、是非とも精神を集注統一して、焼點を作らねばならぬといふ一事は最も大切な條件であります。

私の立場からいへば、宗教上の感化も、道德上の訓化も、身體上の變化も、究局する處、同一の作用から來るものと見て居ります、これが心靈に向へば信仰上道德上の變化となり、之が肉體上に向へば疾病療癒の途となるの

であります、されば精神治療法といふも、實は此心靈的焼點を作るの結果、宇宙の大靈力に感應する現象の一部分に過ぎないのであります、之を大いへば小我と大我の交通問題の一部分と見做さるべきものであります、これ古來より宗教には必ず信仰治療の附隨せる理由も解つて參りました、が、要するに、宗教上の救済、道德上の感化、身體上の治療、これは精神作用に於ける三大問題と見るべきものでありしやう。

第十章 病苦解脱法

一六八

病人に有害な
るは恐怖の念
なり

病氣を有てる人に尤も有害なるものは恐怖の念であります、恐怖が身體に及ぼす悪影響は實に大したものであります、此恐怖の爲に輕症の疾病を重患となし、快癒に赴くべき身體を死地に陥るゝ場合が少くありません、コレラ病を非常に恐るゝ者が、妙にコレラ病にかゝり、肺結核を無暗に怖がるものが、遂に肺病に取つかれるといふ例は、世間に珍らしくないことで、所謂神經といふのはこれであり、そこで此恐怖心を除き去らなると、如何に醫藥を以て手當をして居ても、身體が恢復せないことは當然であります。

二様の恐怖心
其一、死の恐
怖

病人の恐怖に二様あります、第一は死を恐るゝとであります、此病氣で死ぬだらうか、と頻に死を恐れて居ります、斯いふ人は、その恐怖の爲に大に身體を悪くします、然し考へて見ると、此恐怖程つまらぬものはありません、何故ならば、如何に死を恐れても、死ぬる時には必ず死ぬるので、死

死な、いと決
定して養生す
る病人

は我々の如何ともする能はざるものでありますから、これを無暗に恐れるは實に愚な話であります、然し實際病人になつて見ると、死が非常に心配になるものと見えます、ある病人は最初から病氣は必ず癒ゆるものと決めてかゝつて養生して居ます、然しこれは間違であります、私等の養生するは、癒えたしとの希望をもてするのであります、然し必ず癒ゆると極つては居りません、病氣の癒えない結果は死であります、故に病氣が必ず癒ゆると極つて居るとするは、何時も死な、いと決めて居ると同様であります、これ程間違つた考はありませんが、もし病氣が盡く癒ると決つて居るものならば、此世で死ぬるものは一人もない筈であります、そこで注意すべきは、我れ等は養生する間にも、敢へて死を怖れない、全快して健康に復するも、又このまゝ死に向ふも、我々の煩悶すべき領分ではない、全く生死を天に託して往くといふ念を養ふことが大切であります、然し此の死の恐怖を除去するには、尋常の思案のみでは往きません、其處には宗教上の信仰がなくてはなりません、即ち第一我が生命は、神の御手の下に

死の恐怖の除
去と宗教的
信念

一六九

あるものといふ信念が起つて來ること、第二は此の肉體の生活以上に、靈的生活の存することを信じたものでなくては、如何しても死が恐ろしくてなりません、死が恐ろしくてなりませんと共に、それを憂慮するの餘り、病氣を重らすやうなことが屢あるのであります、之れに反して死の覺悟がシツカリ出來て居る者は、随分重患であつても容易に死なないのであります。

基督教界にて有名なる澤山保羅といふ先生は、肺患にかゝられ、醫者の見る所によると兩肺共に腐融して仕舞つて、トテモ生存へて居られない身體であるに關らず、先生は一向平氣で時に説教もせられたり、教會の爲に盡力もして居られて、其後數年間は何の異狀もなかつたのであります、先生の病體を知つて居る醫師は、如何してあの人が生存し得らるゝのだからか、實に奇跡であると驚いて居りました、又私の知人原忠美といふ牧師も、肺患にかゝつて、明石に居られました、もう今晚が六ヶしい、もう二時間もたないといふやうな宣告を、醫者からうけたことが三十餘度であり

信仰によつて
生命を延べた
る實例

ましたが、最初の死の宣告より數年間永く生き延びて居られました、原氏を知つて居る一人の醫師が私に言はれたのは、原さんの兩肺は全く腐蝕して居るから、如何してあれで生きて居られるか解らないが、たゞ一つ解釋のつくことは、原さんが全く心身を神に委せて、少しも病氣を苦にして居られない、それであの身體を保たしめて居る原由であらうとの事でありました、尙私の知る一人の傳道師も、多量の咯血をして、トテモ一年の生命は六ヶしからうと醫者から申渡されました、それでは一年間、思ふ存分、神様の爲に働いて、天國へ往かう、ジツとして居ても一年ならば、働き倒れても一年、私は心ゆく許りに働いて、神様の御前に出やうと決心して、それから一生懸命傳道に盡力し、随分雨の日をも雪の夜をも厭はず恐れず働きましたが、さて一年経つても別に死にさうにもない、それでは神様はまだ自分を此世に置いて下さるのだらうと考へ、一年と思つて居た生命が、臨時それだけ長くなつたのであるから、無益に過ごしてはならないといふ、活動致しましたが、不思議なことには、それ以來、病氣は次第に癒

えて来て、今では七八年健全で働いて居るのであります、これ等は醫學上や生理上からは、サツパリ解らない事實でありますが、斯いふ人には皆信仰の力で死を恐れない結果であると申して差支ありません、即ち死は歸なりといふ心で、死するは神の許に歸るのだ、幸福なことであるといふ何等の掛念もない處から、定命よりは永く生き延び、又は健全に回復したわけでありましょう、兎に角病人に取りて、死を恐れる程、害毒となるものはないと思ひます。

其次に病人は自分の病氣を恐れてはならぬ事であり、死を恐れない信者でも、時には非常に病を恐れる人がある、此病を恐れるといふことが病氣其ものに甚だ害を與ふるものであります、此事は今迄度々御話し申し上げた處でも解つて居りますが、病を恐れると神経が高ぶる、神経が高ぶると必ず其患部に悪影響を來たす、これは極つたことであり、私の精神治療の主なる目的は、病を恐るゝの念を除去するにあり、古來の野蠻人や未開人などの中では、病氣を恐れる結果、疾病は何等かの悪

其二、病氣の恐怖

未開人が病氣に對する恐怖

神即ち病神が祟るのであるとして恐れました、假令は痘瘡には痘瘡の神あり、麻疹には麻疹の神がある、其他あらゆる疫病の如きも、皆疫神の祟だとして恐れました、腦の疾病や神経病の如きは、一種の悪魔が憑く所爲として懼れました、大昔から神々の祟といふ事は、大抵病氣に關係あることゝなつて居ります、然し世が文明に進むに従ひ、さういふ病神の恐怖は、追々に取除かれて參ります、ある人の説に、文明人が未開人と異なる點は、迷信的恐怖の除去せらるゝ點にあると申しましたが、一理ある言であり、然しそれでは文明人には少しも病氣に對する恐がなくなつたかといふに、決して左様ではありません、成程野蠻時代のやうな迷信的恐怖は亡くなり、なりましたが、其代りに、モット深刻なる文明風の恐怖が入替つて襲ふ病を疫癘神の祟として恐れますが、文明人はこれはバチルス力である、結核の働であるとして恐怖するやうになりました、實際今日の人々が、結核やバチルスを恐るゝ事は、古代の野蠻人が疫神を怖るゝより以上の恐

文明人が病氣に對する恐怖

病氣を恐るゝ
の實例

怖を以て居ります、此恐怖に襲はるゝ結果、其疾病を重くする例は、數多あるのであります、斯いふ人々は、たゞ宗教上の慰安を持つて居る許りでは、十分の効能はありません、宗教上から死の不安心は除かれて居るに關はらず、矢張病氣に對して一種の不安を有つて、いつも消極的に考へる癖の人が少くありません、先般私は某地に參りました處が、一人の少女がフト咳嗽が出初めて、一寸胸のあたりが痛み出しました、然し左のみ氣にも止めないで學校へも通つて居りましたが、どうも治らない、そこで醫者に見て貰つた處、多少肺炎を犯されて居るといふことでありましたが、然し醫者は其事を直接少女には言はず、其両親に話したのであります、そこで両親は非常に心配して、自ら其氣色が面に現はれて來ましたから、少女もそれと氣づきまして、私の病氣は肺であるかないか話してくれよと頻に問ひかけます、そこで母親は止むなく肺炎を犯されて居るといふことを話しました、それを聞くと、少女は其まゝ床について仕舞ひ、其晩から高度の發熱を仕出したのであります、兎角心を悪い方へと向けると遂に其惡

自分で病氣に
して仕舞ふ人

精神が影響して、肺の局部をますます悪くするのであります、又ある人は非常に肺病を恐れて居りましたが、フト咳嗽が出るやうになつて癒らない、これは適切に肺病にかゝつたのだと決めて仕舞ひ、ある醫者に診て貰つた處が、別に肺を犯されては居らない、多少氣管に故障があるのだと申しましたが、其人はどうも安心が出來ない、又他の醫者に診て貰つた處が、これが進昂すれば肺になるかも知れないが、今の處では、別に肺に異常はないと申しました、然し其人はナカ／＼満足が出來ない、もう肺病になつて居るに違ひないけれども、醫者等は自分に氣やすめの爲に、アンナ事をいふのだと狐疑して、又他の醫者に見て貰ひましたが、同様の診察であります、然し彼はそれでは不満足で、何か隠されて居る心地で、トウト自分で肺病に違ないと断定して仕舞ひました、そこで咳嗽は取れない、夜分には寢られない、時に汗をかく事がある、そら寢汗が出て來た、確に肺結核に陥つたと、自分で自分を見立てゝ苦悶しつゝ、次第に身體を弱くして居るのであります、斯ういふ恐怖心に襲はれて居る一種の精神病者に、幾ら藥

石を投じて見ても全癒は難しからうと思ひます、斯いふ弱い精神を取直して積極的に元氣をつけて、病氣を恐れないうやうにするが、精神治療法の一大要務であります、俗に「氣を静めよ」と申ます、氣を静めるとは、餘り狼狽したり悲觀したりせないうやうに、心氣を落つけることであります、其心氣を落つける方法として、私が前に申上げたる修養を怠らすせらるゝならば、精神が自ら定まつて、健康體のものは病氣を感せず、病人ならば其疾病を苦にせず、恐れないうやうに、氣力を養ふことが出来、即ち第一信念によつて、死の恐怖に勝ち、精神修養法によつて病氣の恐怖に勝ち、斯くて服藥養生する時は、其人の病苦は確に脱却するに至ることゝ思ひます。

昔時白隠禪師が重い腦衰弱に罹つて困つた結果、白幽先生といふ聖者を訪ひ、精神修養の結果、病氣を忘るゝの術を傳へられ、熱心に修養して、遂に無病息災の身體になつたといふ事であり、又近時原坦山といふ僧侶は、病は即ち感なり、病めりといふ惑の取り去られた時、其人は健康無病であると主張し、所謂惑病同源説を唱へて天下に宣傳いたしましたが、原氏

は老年に至つても、一回も病氣に罹らず、大往生を遂ぐる前日、手づから自分の死期の近づける報知を友人に差出して此世を逝つたといふ事であり、又前述の澤山保羅や原忠美の如き人々も、泰然として心を生死の境外に立て、居られた結果、普通の醫師等の診断より數年間も永く活き延びることが出来たのであります。

全體疾病は三個の原因より來るものであります、従つて其治療法にも又三個の異なる方途があります、第一は單に肉體上の不調和から來た疾病で、これには普通の醫藥を用ゆれば、其効を奏することは疑ありません、第二は精神から來る疾病で、俗にいふ氣を疾ます結果から來る病氣であります、是には其氣分を立て直させて、精神を新にさせなければ、たゞ單に醫藥のみでは治りません、精神治療法は主として此方面に力を盡さうとして居ります、第三は心靈の痛みから來て居る疾病で、何か罪惡を包んで居る結果、身體の不健康を來たして居るもの、或は心に一種の痛みをうけたる結果、身體を弱くして居るものであります、斯いふ患者には、勿論醫藥の

効能のあるべき筈はありません、且精神治療も及ばぬ處でありまして、これには心霊の疵を拭ひ去るべき慰安が必要であります、宗教的信仰は勉めて此方面に實功を奏するのであります、然し人間は弱いもので、單に肉體上の病氣に罹つても、直に神経が手傳ひます、何だか氣が塞いで來て心を惱まします、さうして其氣やみから一層其病を重くするのであります、そこで單に肉體上の疾病をうけて居る人も、醫藥をもて養生をなすと共に、精神的治療法に通じ居れば、其疾病は自ら早く癒え、軽く濟む道理であります。

以上申上ぐるやうな立場からして、本書を公にするに至りました、そこで本書が一面には、醫者諸君の参考ともなり、他面には、宗教家諸君の参考となれば實に結構であると思ひます、否、露骨にいへば、醫師や宗教家よりも實際疾病に難める人々を慰撫奨励すると共に、多少にても其病苦を減退し消滅せしむる方法ともなれば、本書の目的は到達せられないといふものであります。

本書を公に
する目的

私は醫者ではありませんから、醫學上の立場から何等言ふべき權能を有つて居りませんが、心理上の結果からいへば、疾病治療には、物質即ち藥劑の力を借るの外、精神力を要することが多大であることを認めて、精神治療法の名の下に、心身共に慰安を得べき道を示すこと、これ基督教家の責任であることを感じました、然し本書の如きは、此方面に於けるホンの初歩の事柄を説明したに過ぎないので、精神治療に關する一層完全なる解釋は尙將來に待つこと多いことゝ考へます、たゞ本書が幾分にも此問題に對する曉鐘となり得ましたなれば、私の幸甚とする所であります。

精神治療法(完)

信仰問題と潜在意識